
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~新しい世界に霞む灯~

夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～新しい世界に霞む灯～

【Nコード】

N5808I

【作者名】

夜

【あらすじ】

初めて会う面々。それも殆どが美人美女美少女。彼は思わず唾を飲んだが、その中に見知った存在を発見。笑みは色濃く彼の顔に浮かび、その眼差しは紅い瞳に吸い込まれた。

魔法少女リリカルなのはStrikersの二次創作です。キー

ワードに苦手な、或は嫌悪を抱く単語がありましたら閲覧はなさらないで下さい。閲覧は自己責任につき。悪しからず。

部屋には業務に於いて必要最低限の物しか置かれていなかった。だが机上には本当に必要か考えさせられる程の書類が適当に置かれていた。

しかしその書類には煙草の灰が落ち、酷く汚い。壁紙やカーテンは煙草のせいか黄ばんで汚れている。

「はいはい、分かりましたよ、理解しました。人手不足じゃ仕方ないですからね……それに上官殿のご命令とあれば拒否権なんて有りませんから。何故私が行かなければならないのかは分かりませんが行ってあげますよ、そこに」

その男は辛辣な言葉を電話先の上官である人物へと浴びせた。皮肉を吐く口にくわえていた煙草を灰皿で揉み消し、副流煙を受話器へと思い切り吹き掛けた。相手に届く様に。

俺の為に癌で逝ってくれ。

些細でいてとても自己満足な復讐を果たした瞬間だった。

「……リミッターを？ いやいや、俺がデバイスを使わないってのをご存知でしょ？ まあ、ベッドの上なら必要ですがね」

フンと鼻で笑った男はまた煙草に火を点けた。そしてライターをソファアに投げ付けた。

「……明日から行ってきますよ、上官 いや、元上官殿」

電話を一方向的に終え、ライターよろしく電話も投げ付けた。
煙草の煙で輪っかを作って遊んでいた彼だったが、組んでいた足を解き、無造作に髪をかき上げた。

「馬鹿が。テメエで行きやがれ、デブで能無しのボケた爺め……そうだ、ロツサに有る事無い事吹き込んで豚箱にブチ込むのもいいな」

その様を想像して、大きな声で笑い、机上の書類に目を遣った。
そして笑みで満たされていた顔を歪めた。

「……適当に誰かに押し付けるか。出向じゃなく、ほぼ異動だしな」

書類の一番上に適当に積んであった封筒を抜き取り、封入されていた書面を見る。そしてクシャクシャに丸め、またもソファーに投げ付けた彼は、ソファーに怨みでもあるのか。

その書面には機動六課と記されていた。

1st Breeze

「私にも分からんわ。けどこんな事は有り得へんな、出向してくる人について情報が掲示されへんなんて」

「……人手不足で情報伝達に遅れが出ているか、こちらに出向に対して異を唱えさせないように敢えて情報を流していないか。どちら

にしても困ったね」

「前者であればええねん。ただ、厄介払いの押し付けは御免被りた
いわ」

機動六課、総部隊長室。

この部屋に二人の女性が居た。若く、僅かに少女のあどけなさが
残るものの、佇まいは淑女のそれに近い。

「……ハア。嫌な予感がしてきた。私の予感は当たるんや、中々」

「困った予感だね。外れてくれる事を祈ろうか」

頭を抱える二人。

機動六課は設立されたばかりで、人手が増える事は嬉しいのだ、
両手放しで喜んでもいいくらいに。だが誰でもいい訳ではない。猫
の手でも借りたい程に忙しいが猫なんて頼んでいない。それも気ま
まで飼い主にまで牙を剥くような猫など以つての外だ。

「なあ、フェイトちゃん、見て？ 鳥肌が半端やないんやけど」

「ごめん、今は眼を開けられる状況じゃないの」

フェイトと呼ばれた金髪の紅いルビーを模したかの様な瞳を抱く
少女は、瞼を閉じ、紅い輝きを見えなくした。ついでに顔も勢いよ
く反らした。そんな彼女ではあるが、その強さ、ルックスは局でも
秀でており、かなりの人気を博している。

そんな彼女達の耳に、酷くタイミング良く扉をノックする音が聞
こえた。息を呑む二人。ゴクリと唾を飲む音が聞こえる以外、何も
音が聞こえない。

静寂を破る様に扉が開くその先には。

「はやてちゃん、訓練終わったよお」

二人は心臓が止まった気がした。入ってきた彼女は空気が読めるのか読めないのか。

彼女は高町なのは。エースオブエースなどと呼ばれ、時空管理局のみならず、ミッドチルダに広く名前が広まっている。

そして彼女に呼ばれたのは八神はやて。彼女もまた広く名が知られ、この三人の中で最も強いのではと噂される程。

「なのは、うん、お疲れ様。タイミングは最低だったけど何だか助かったよ」

「ほんまやで。一瞬心臓が止まったわあ」

自分が悪い事をしたかのような話の流れに、彼女は頭を捻ったが、残念ながら何も思い当たらない。だが、それは当然だ。

「失礼するよ」

頭を未だに捻るなのは後ろに音も無く現れたのは一人の男。火は付けていないが口に煙草をくわえ、着ているスーツは適当に。苛立っているのか、足で床を叩いている。

「あ、ごめんなさい」

何と無く謝ってしまったなのはは遮っていた入口から身を寄せた。男は室内に入ると、ソファーに座っていたフェイトの隣に立ち、真っ直ぐ前を見た。立っている様は上官に対するそれだが、口にく

わえた煙草のせいで台なしだ。

「今日から一応書面上では出向する事になりましたブレイズ・イェーガーです。宜しく頼みます、八神課長」

ブレイズと名乗った男は、座っているフェイトに視線だけを頂戴させ、口角を上げてニヒルな笑みを零した。

「久し振りだな、フェイト」

「私の経歴を記した書類をお持ち致しました。御覧になって頂けますか、課長殿。特に経歴や主に経歴とかあとは経歴などを」

フェイトは今日二度目となる頭を抱えるという行動に移った。

うん、最悪。何で居るのかな？ 有り得ない、うん、有り得ない。何でそんな事を書く必要があったのかな？ 頭、冷やさないと。私だつてべべ、別に好きでつつつつ、付き合ってた訳じゃ、ないんだから。

頬は僅かに赤らんでいた。その理由は隣に立つブレイズにもあるし、彼が持ってきた書類にもあった。

チラリと目に入った書類は最悪だった、彼女にとって。特に経歴の欄が。

俯いていた彼女だったが、はやてをチラリと盗み見た、勇気を振り絞って。

「……ふうん。フェイトちゃん、私は初耳なんやけどな、ブレイズ君と付き合ってたなんて。お父さん、悲しいわあ。後で根掘り葉掘りちゃんと聞かせてもらおうぞ？」

「やっぱりだよ、ほら。ブレイズ、有り得ない、本当に。今すぐバルディッシュでブレイズの存在を消して、なのはが入ってきたところからやり直したい」

ブレイズはそんなフェイトを見て喉で笑いを押し殺した。久し振りに会った元恋人は変わっていない、と。なのはは未だに頭を捻っていた。

「クク……そう言っなよ、俺とお前の仲だろ？」

「うん、触らないで」

「へえ。何時だってお前は俺に触られて喜んでのに」

フェイトは無視を決め込んだ。こんな不毛な会話を続けたところでブレイズ相手では分が悪いと。悔しかった彼女は上品に彼の脇腹を抓った。

あ、また筋肉ついてる……やっぱり前よりも良い体になっているのかな？　かな？

瞬間過去に浸りそうになった頭を振り、現実を意識を無事に引き戻し、彼女は努めて冷静に抓る力を強めた。

「痛い、かなり痛いぞ、それ」

脇腹に感じる鋭利な痛みを歪ませ、ブレイズは眉間に皺を寄せた。

いちやつく二人をはやてはわざとらしい咳ばらいをわざとらしくする事によって意識を自分へと向けさせた。

「んん。二人とも、いちゃつくんなら是非自分の部屋でしてや。それとなのはちゃん、頭を捻るのは止めて、フェイトちゃんの隣にでも座ってーな」

急に話を振られたなのは、ブレイズを見遣りながらフェイトの隣に腰を落ち着けた。首を摩っているあたり、頭を捻り過ぎて若干痛めたのか。

「ブレイズ君。フェイト隊長との関係はさておき、何で一応書面上は出向なん？」

「上の方々のお体の具合が悪いらしくてですな」

(それがどないやつちゅーねん)

胡散臭そうな悲壮感漂う表情のブレイズにはやてが首を捻った。分からないという意味を視線に込めて、彼女は彼の悲しげな瞳を仕方なく見詰めた。

「よく肥えた腹の御蔭で腰を……頭痛にも悩まされているそうです。あ、それと痴呆もでした」

両手を広げ、やけに染みつたれた言葉を彼なりに上品に解き放つ。顔は一応悲しそうだ、一応。はやては溜息を零した。異動の理由はもはやどうでもいいといった具合に。

「もうええよ、その話し方も止め。無理してる感じがするんよ」

「フム……俺も疲れた。仕事仕事で生きてきた俺には難しいね、コ

コミュニケーションってのは」

「へえ。皆そんなに強いんだ、俺を呼び立てる必要もないんじゃないか？」

「何も戦うだけじゃあらへん。事務処理だつてあるし、ブレイズ君には新人の子の指導もしてもらいたいんや」

今度こそブレイズは溜息をついた。

あの後、職場の仲間とのコミュニケーションを十分に堪能した後、仕事の話も含め、彼女達の案内で課を回る事になったのだ。

「何だつていいさ。はやてが一緒なら、ね」

ブレイズははやての手を絡め取り、至近距離で彼女の瞳を見詰めた。

鼻先僅かに数cm。その距離に慣れていないのか、彼女の瞳は揺れた。そのさざ波の様な揺れに彼は酔いしれそうになったが、何時の間にか、背後でデバイスを構えた少女が居た為に、男らしく断念した。

「物騒な物を下ろせ。そんなに紅いモノが好きなら、自分の瞳を鏡で眺めるかサントのコスプレでもするんだ」

「ブレイズの血は何色なのか気になってね」

ニコリと形容するに相応しい笑みで優しくバルディッシュを下ろしたフェイトはブレイズをきつく睨んだ。

「はやては少しぼんやりと虚空を眺めていた。そしてなのはは苦笑いをするに留めていた。」

「それにしても良い課だな。前の糞みたいな所とは大違いだ」

「へえ。ブレイズは糞だったんだ」

「女性が言うには随分上品な言葉だ。それに、敢えて言うならお前はフローラルな糞様にたかる蠅だったよ」

「一瞬フェイトの体が紫電を纏った様に見えたが気のせいだろうと決め込んだブレイズ。」

フェイトのプラズマから逃れる為に颯爽となのはに話を振った。

「そういえば自己紹介がまだだった。俺はブレイズ・イエーガー。」

君の名前を聞きたいな」

「私は高町なのは。なのはって呼んでね、ブレイズ君」

「そうか。それじゃ、なのは、宜しく頼むよ」

「宜しく頼まれちゃうの」

ブレイズの差し出した右手を、なのはは優しく握った。

女性特有の柔らかさに、彼は数秒間右手に全力で集中した。そして思う。

「こんな少女がエースオブエースとは。随分と重いモンを背負っていやがる。」

フェイトやはやてとは何か違う運命めいた重しに、彼は何故かやる瀬ない気持ちになった。彼女がそれを受け入れていたとしても、

だ。

「今ならまだ間に合うで、多分やけど」

浸っているブレイズの耳に近付いた唇が、彼の情欲を掻き立てたのもつかの間。先に歩いていったフェイトが彼を見て笑っていたのだ。所謂般若、そう形容する以外に言葉が見付からない。いや、見付ける暇など無い、勿論彼女から彼が逃れる術もだ。

「またそうやって。女の子だったら誰彼構わず手を出して。全然変わってない」

「それが俺だ。どうだ、安心しただろ？」

「うん。取り敢えず余計に不安になったよ」

握っていたなのは手を潔く離し、やれやれといった具合にブレイズは肩を竦めた。

そんなやり取りをしている間に、フェイトに代わって先を歩いていたはやてがとある部屋の前で止まった。ブレイズには何故だか分からないが嫌な予感がした、いや悪寒が。そしてはやては胸を張って宣った。

「取り敢えず、手っ取り早く模擬戦といこか」

きたか。

ブレイズは頭を抱えた。視界に入った無機質な床を踏みにじったところで何も変わらないが彼は踏みにじった。一通り踏みにじり、彼は感じた。

「面倒だ」

「「何が？」」

この野郎。

もう一度ブレイズは床を踏みにじった、全力で、だ。

2nd Worst

ブレイズは腹が立っていた。局のエース相手に模擬戦とはいえ戦う人間の気が知れない、と。そしてそんな愚かな人間は自分だと気付いた彼は、訓練室禁煙を無視して喫煙を始めた。

煙草の煙よろしく、煙に撒いて逃げたかったがそうはいかないらしく。断ろうと思えば断れた。拒否権はあった。

「何時も逃げてばかり。逃げないのはベッドだけなんだよ、ブレイズは」

彼の余り程度の良くない毛並みは、とある執務官に逆撫でされてしまったのだ。

そんな執務官の小言を聞いた課長と協導官の二人は苦笑いをするに留めていたが。

「ガジェットでも何でもいい。フェイト、早くしろ。俺は腕っ節も立つってのを教えてやる 惚れんなよ、Lady?」

煙草をしつかり吸い切ったブレイズはしっかりと携帯灰皿へと処理をした。マナーがなっではいるが、何分吸った場所が悪すぎた。

「少し……頭、冷やそうか」

「禁煙なのが悪いんだ。これは一種の生理現象だ、君達と一緒にだね」

「下品な物言いに頭が冷え切ってしまったのはは、頬を少し赤らめながらクルクルと髪を弄った。」

「もういいよ。頭、冷やして」

突如として変わった景色。

フェイトの掛け声がかかるよりも早く移り変わったそれに、彼女を批難する事を忘れ、ブレイズは思わず嘆息をついてしまった。

「フェイトちゃん。セットアップしてからとかでもよかったんちゃうか？」

多少同情混じりの表情で詰め寄るはやてに、フェイトは違つと首を横に振った。それに併せて揺れる彼女の艶やかな髪からは暖かい、太陽の甘い香が仄に漂う。

「甘いよ、はやて。だってブレイズは　デバイスが無いんだ」

瞬きを三度。はやては何かの聞き間違いかとフェイトを疑った。まさか素手でガジェット相手に立ち向かうのか、と。

その疑問は次に発せられる彼女の言葉でさらに霞がる。

「ブレイズは魔法使い、らしい」

固まる二人を他所に、フェイトは少しの悔しさと、程々の憧れを籠めて、もう一度呟いた。

「それに、悔しいけどブレイズは、強いんだ」

「 アデアット 」

この世界では聞き慣れない言葉を、いや呪文を彼は唱えた。
優しく紡がれたその言の葉は、ゆっくりと彼を包み、優しくその
右手に光の根を下ろした。

まばゆい光が弾けた先には一振りの太刀。それは本当に武器がど
うかを考えさせられる程の物。

切っ先は光をも裂き、刀身は大気に振るえ、鏢は淡い金に輝いた。
雪の叢消えの如し。

彼は既に正眼に構えていた。しかしそれは彼独特のモノ。切っ先
を前へと向け、穿たんとするその様は、一身槍。振るう大気の中で、
彼は身を振わんと、既に現れていたガジェットを睨み付けた。

「 来い 」

果たしてガジェットに理解出来たのか。

ブレイズが呟いた言葉に応じて、小手調べとばかりに二体のガジ
エットが肉薄する。

単調な攻撃ではあるがそれは確実に彼の生命を掻き消さんと迫る。
彼は避けた、そして同時にガジェットは裂けた。

「 なんやねん…… 」

まるでアニメやゲームでも見ているのかと、はやては至って健康
な自身の目を擦り、再度モニターを見遣った。

「 す、凄い 」

隣でなのは素直に驚きの言葉を漏らす。

壊したというよりも切ったという表現が相応しいそのガジェットは、文字通り二つに分断され、地に転がった。

中身の見えるガジェットは少し、何故だか少し淋しげに映る。

「……ふんだ。カッコイイなんて、思ってない、よ？」

誰に対してか分からないフェイトの言葉は、誰にも届かず、スピーカーから漏れる音に掻き消され、役目を終えた。

踊っていた。彼が踏むワルツは、綺麗だった。そのステップに不釣り合いな物を振り回す彼の相手は、太刀か、ガジェットか。

どちらにしろ、彼のワルツは終わりを見せず。観客は歓喜に湧き、ガジェットは大量に沸いて出た。

「多過ぎだ、馬鹿がッ！」

額に軽く汗をかいた彼は、スーツの袖で擦り取った。皺になったスーツを後でクリーニングに出さなければと、場違いな事を考えた彼のスーツは、ガジェットのコードが掠ったせいで裂けた。

「新調する、今度は飛び切り高いスーツだ。勿論経費で買うんだ、それがいい。そうだろ、ブレイズ？」

自身に言い聞かせ、ニヤリと笑った彼の口角はさほど上がっていない。上がるのは爆発するガジェットの炎。高ぶるのは爽快感。久し振りに人間”以外”のモノ相手に自慢の太刀を振るうのは、彼に

は楽しく感じられた。爽快な彼の軽やかなステップは止まらない。羽の様にフラフラと舞い、それでいて大気を叩く翼の様に力強い。地に着いた羽が優しく宙へと舞う。それに不釣り合いに地が剉られる。見えない始動、計れない拍子。気付けば空を切り裂くその様は絶対なる捕食者。弱きを喰らい、己が糧とし、強きを穿つ。

「課長様方に私の飛び切りを御覧になって頂こう」

その笑みは甘く、深く、透き通り、凜猛だった。笑みと言うにはもはや可笑しく、獣の咆哮に近い。

甘く宣言された飛び切りを放つ為に、彼は翼を休めた。

「……少しでいい。力を寄越せ」

捻れた。ブレイズの右腕が大きく脈を打ち、空間を擦曲げたかの様に、大気を震わした。辛うじて彼の着用しているスーツは原型を保ってはいるが、その下では何かがうごめいている。

果たしてそれは何なのか。

モニター越しにそれを眺める三人のエースには分かる筈もなく、解っているのは彼が何かをしたという事。

その気味の悪い右腕が握り締める太刀は、重い金属音を不規則に鳴らし、気味悪さを一層際立たせるのに一役買っていた。

「そうだ、それでいい。俺を誰だと思っているんだ …… 分かれ
ばいい」

その優しくも、凜とする葉は、大樹をも揺らす。

「な、なんや、あれ……」

はやては己の口から零れ出た言葉に、再度現実を見詰めさせられた。

彼女達の視線はブレイズ、いや正確には彼の右腕に囚われていた。視線の先の、スーツから唯一垣間見る事が出来る彼の手は、血管が浮き、白い肌は朱黒く変色していた。その手の人間味は既に欠落し、悪魔のそれに近い。

「来いよ、屑ども」

ブレイズの見据える先にはガジェット。ブレイズを見据えるのは三人の少女。今までと変わらない様相。だが、ブレイズの瞳は澄んだ海を容易に連想させる碧から、正しく血に濡れたそれに。

都合良くガジェットは全機が姿を現していた。その様を血に映した彼は、今日何度目か分からない笑みを零した。

そしておもむろに右腕をガジェットに向け、太刀を不可思議な呪文と共に消し、掌を開く。

相変わらずその右腕は気味が悪く、空をも握り潰さんとする程に力強い。

ガジェットは合図を取ったかの様に、彼へと突撃した。ただ右腕を差し出す彼は、無防備という言葉に当て嵌まる。

自身を肉薄させるガジェットも居れば、ケーブルの様な物を穿つガジェットも居た。その全てが彼を囲う様に、飛び出した。

動かなくなつた彼を見て、少女達は眼を背けたかった。模擬戦を終わらせようと思った。逃げると叫びたかった。だがさせてくれなかった。自分達を映していない彼の朱い瞳が、何かを握ろうとしている彼の右腕が、彼という存在が、何もさせなかった。

彼女達の思いを知ってか知らずか、彼は右手を少しずつ握っていた。何かを掴もうとしているのか潰そうとしているのかは分からない。彼だけが分かる事だ。

ガジェットはそれを知らない。機械が彼を潰すにはあと少しだった。本当にあと少しだったのだ。

「魅てるよ、Ladies。魅せるよ　Brazee」

全力で掌を握り締め、呟いた。その言葉はブレイズの周囲を焦がす。黒く暗いと言うには眩しく、赤く眩しいと言うには暗い、烈火が、全てを焦がした。

あと僅か、極僅かの距離に迫っていた機械の群れは、全て灰になった。細かい灰はブレイズへと降り注ぎ、モニター越しには、雪の降る街に佇む青年しか映らなかった。

何時の間にか、彼の右腕は人間だった。彼の瞳は人間だった。なのは気付いた。デバイスを堅く握り締めていた事に。それが恐怖からか、興奮からか。恐らくその前者からきたであろう本人が漸く気付いた身体の震えは、止まっていなかった。だが、その恐怖はブレイズという人間に与えられたものではなく、彼の使った寂しい焰に依るものか。彼女は一度、彼とタイマンで語らなければならぬと、随分不思議な事を考えていた。

「ヨオ。俺だつてやれば出来るつてのが分かっただろう？」

久し振りにブレイズの戦いを見たフェイトは心を震わした。
変わっていない。

他にも何かを感じた彼女ではあったが、それを言葉に出来る程のキヤパシテイは既に無かった。有るのは好奇心。それは彼女を突き動かし、バルディッシュを握らせていた。何度彼と闘っても恐怖以上に強さを肌で感じていたフェイトにとって、この模擬戦は相手が

自分からガジェットになっただけの詰まらないショーだったのだ。故に好奇心が余計に働いたのか。

「はやて、少しは見直してくれたか？ もしそう思うなら今夜、一緒にワインでも飲もう。良い具合に雪が降っているから。二人で体を暖めあつのもいいんじゃないかな？」

本当にワインを準備しそうな自分に、思わず苦笑が零れた。

まるで自分の様に反則的な技を使ったブレイズを、はやては他人事のように感じられなかった。

暖めあわんでも、飲めば暖まるやろ。

フェイト以上に彼女はブレイズとウマが合うのかも知れない。

「……取り敢えず、だ。こんなイイ男を無視するもんじゃない。シヤワーを浴びさせてくれ。それから皆でワインを飲もう。きっと美味しい。久々の模擬戦も楽しかったし、美女も一緒だからな」

何処から出したのか分からない赤ワインを片手に、ブレイズは笑った。

彼女達は取り敢えず、と笑いながらささやかな彼の歓迎会を開こうと考え、もう一度、優しく笑った。

3rd The sea and the ground

「へえ……スカリエッティ、ね」

そう呟いたブレイズの瞳が、一瞬狂気に染まったのをはやては見
てしまった。

彼は笑っていた。その狂気に映る自分を見た彼女は、彼から目を
逸らす事が出来なかった。

模擬戦終了後、無事に暖かいシャワーを迎え、ついだとばかりに機動六課へ迎えられた彼。ガジェット？型の撃破の後に予定されていたエース三人との戦いは阻止した、全力でだ。フェイトが急に模擬戦を始めたせいで、結構な集中力を使った故に疲れたとは彼の言い訳。疲れたのは本当だが、集中力云々は適当だ。本当は勝てる気がしなかっただけの事。彼の武器は己が身。異常な身体能力とある程度の魔力を持つその身。太刀の扱いは達人とも言える部類に入るであろうが、彼女達のように反則的な必殺技など無い。だがそれでいて何故自身が武器と言えるのか。

それは彼の固く閉ざされた口が、何れゆつくりと語るだろう。

「……取り敢えず、此処は何時だってエネミーラインって事なんだから？ 命が幾つ有っても足りないな」

ブレイズは狂気と顔を俯かせた。右手に持ったワイングラスを揺らし、注がれたワイン独特な芳醇な香で遊んでいた。

「此処に来たのも何かの縁だし、一緒に頑張ろう？」

俯いたブレイズを落ち込んでいると思ったのはは優しく彼の肩に手を置いた。

此処が彼女の部屋で尚且つ二人きりの状況であったならば、大体の男は勘違いをするかもしれない。勿論彼女自身は無自覚で、此処は部隊長に宛がわれた部屋だった。

「……ああ、そうだな。前は糞だった。此処なら頑張れそうだ、美人が沢山だし」

「今すぐ異動して欲しい、うんと遠い所に」

「知ってるよ、それがお前の照れ隠しって事くらい」

「……本当に異動しちゃえ」

「あー……流石に今日は疲れた。模擬戦、辛かった」

「そうは見えなかったよ。というか昔より速く強くなってたよ？」

「いや、そいつは気のせい。久し振りに見たからだろ」

外の景色は車の速度に比例して目まぐるしく変わっていく。

夜の町並みは昼とはまた違った色を生み、知らない処へ来たのはという錯覚すら与える。

ビル群の窓から外へ差し込む堅い光は、道行く人々の脚を進めさせるカンフル剤。その影響を受けてか、ブレイズのアクセルを踏む足にもやや力が入っていた。

「本当はね？ ブレイズと一緒にまた仕事が出来るって思うと、うっん……一緒に居られるって思うと、嬉しいんだ」

フェイトの呟いた言葉に、アクセルは緩んだ。

僅かな変化に彼女は気付かず、気付いてしまったブレイズは大人しく彼女の次の言葉を待った。

「私、まだ好きだよ、ブレイズが」

フェイトは運転しているブレイズを見た。だがブレイズは相変わらず前を向き、それが彼女を困らせた。

二の句が言えなくなった彼女は、彼を見習い前を向いたが、フロントガラスに写る彼にばかり目がいつてしまう事実に溜息を零した。

「俺も好きだ」

簡単に呟いた。赤信号だからブレーキを踏む様に、淡々と、至極明解にブレイズは応えた。

「だからといってやり直そうなんて言わない。このままだったらまた駄目になる。そんな気がするんだ」

そう言っって苦笑するブレイズは何故だか泣きそうに見えた。自分から言っった癖に、その顔は狡いとも思えた。

「難しいな。男女ってのは」

「恋愛は簡単なモノじゃないんだ。そうでしょ？」

フェイトの家の前に白いスポーツカーを止めたブレイズは、漸く彼女の瞳を見た。

赤い宝石は泣きそうだった。その涙で死ねたらどんなによかったか。

「けど、だから恋をするんだよ。難しい恋程燃えるモノは無いって言うからね」

「そんな話聞いた事が無いな。消し炭になるなよ？」

フェイトの瞳に対し、ブレイズは精一杯の悪態をプレゼントした。それは自分の為だったのかもしれない。

彼女は違うよと笑い、一瞬の隙を狙って触れるだけのキスをプレゼントした。

「消し炭になんてなるもんか。私はブレイズに焦がされたいんだもん」

言いたい事を言って家へと入るフェイトを、ブレイズは唇に触れながら見送った。

やけに暖かいと、満更でもなさそうな、だけど泣きそうな笑みを、バックミラーに写った自分に捧げた。

「フン。やってくれるじゃねえか、イイ女」

ブレイズの車は待ってましたとばかりにけたたましいエンジン音を上げ、タイヤは全力で回転し、夜の街を走り抜けた。

闇に浮かぶテールランプをひそかに見送ったフェイトは、唇を優しく撫でた。

「……暖かい」

泣きそうになったのは何故か。それはフェイトにも、ブレイズにも分からない。唯一分かるのは、唇に感じる熱がじんわりと、身体へ伝わっているという事だった。

あれは何時の事だったか。

ベッドへと身体を投げ出したブレイズは、未だ熱の籠る唇を撫でた。彼女の味がするなどと、馬鹿げた事を考えているが、彼にはそれが少し嬉しい。

視線の先には暗闇に浮かぶ天井。瞳を閉じれば暗闇に浮かぶのはフェイトだけだった。

あの頃は可愛かった。

過去形にするあたり、彼女は変わった訳ではないが、彼には変わったと思えた。可愛いという表現よりも綺麗という言葉が似合う女性になっていた。

ブレイズがフェイトに初めて会った時、彼女は緊張していた。それもその筈、その時点で既に彼は執務官だった。

ブレイズがフェイトと初めて所謂デートに出掛けた時、彼女はもっと緊張していた。彼は何となしに誘っただけだった。多少疚しい気持ちもあっただろうが。

気付いた時は手遅れとはよく言ったものだ。ブレイズは笑った。本気になっていたのは彼だったから。

「そうだ、何時も俺からだっ たな……」

暗闇に煙草の火が灯る。匂いを撒き散らしながらも、その煙は現実からブレイズの瞳を逸らさせた。

そして呟く。出掛ける時も、想いを伝えた時も、キスも。

「過去に浸るのはよくない。死ぬ時に浸ろう。そして逝く。俺はもう寝るんだ」

煙草を硝子製の灰皿で揉み消し、彼は瞳を再度閉じた。夢を見る為ではなく、明日の為だ。そして存外早く、彼は明日の為に、夢の国へと旅だったのだった。

明くる朝、誰よりも早く機動六課に姿を現したのはブレイズだった。来て早々、訓練室に忍び込んだ彼は、太刀を正眼に構え、瞳を閉じた。聞こえてくるのは己の呼吸音。感じるのは空気の流れ。穿つのは対峙する敵、それは自身。

途端、極限に集中していた彼に、ノイズが届いた。ゆっくりと入口を振り返れば、見知らぬ人間が一人、佇んでいた。

「誰だ？」

「貴方こそ」

ノイズはブレイズを僅かに苛立たせた。邪魔をしておきながらその態度は何だ、と叫びたかったが、それは自分の勝手故に彼は言わない。

相変わらずノイズは彼を見て離さない。

「……ブレイズだ。一応執務官つてやつだ」

ノイズの原因である少女は黙りこくる。開いた口が塞がらないと

は正にこの事か。少女の情けない顔に思わず失笑してしまうのはブレイズだけではないだろう。そして何とも言い表せない気まずい雰囲気は漂うのは今更か。

「テイ、ティアナ・ランスター、です」

そこまで戸惑われると、自分が悪いのでは、と考えてしまうのは何もブレイズだけではないだろう。

ティアナと言った少女は世話しなく可愛い瞳を瞬かせ、視線を宙へさ迷わせる。その動きが怯える小動物に見えて彼の笑いは吹き出ってしまった。

「いや、スマン。余りに可愛かったからつい、な」

少し恥ずかしい姿を見せてしまった事に、互いに苦笑を零した。ティアナに至っては顔を朱に染めていた。顔を見られる事が恥ずかしいのか、彼女は顔を俯かせた。前髪が掛かり、彼女の表情を窺えるのは局の無機質な床だけだ。

恥ずかしがる彼女に近付き、ブレイズはゆっくりと肩に左手を置いた。自分の右肩に感じる、優しくも重く、そして頼りがいのある手に、彼女は僅か驚いた。既に赤みは消えている。

「良いデバイスだ。そして君も良い魔導師だ。だが、疲れている体に鞭を打つのは良くない。そんな事をする奴はきつと無知だ」

口角を上げ、笑って見えなくもないブレイズの表情を読み取るには、ティアナには難しかったようだ。小首を傾げる彼女に今度こそ優しく笑った彼はそつと左手を下ろした。

逃げていく熱に、彼女は僅か寂しさを覚え、その瞳は何時の間にか熱源を追っていた。

「君が何故そこまでするかは聞かない。だが……何かあったら俺に言ってみろ。聞いて欲しい事が有るなら言ってみろ。案外、言ってみるもんだぜ？」

ティアナの顔を覗き込むブレイズ。急に縮まった距離に高鳴ったのは鼓動。それを止める術など無く、彼の碧い瞳から逃れる術も無かった。碧い瞳は自分の内の深くまで見透かしていそうな気がして、彼女は不器用さをおくびも隠さず呟いた。

「よ、余計なお世話、です」

「ククク。そうか。世話を焼いて欲しかったら言え。こつ見えて俺は結構頼れる男だぜ、Lady?」

少し嫌らしく、中々優しく、随分と暖かい笑みを貼り付けたブレイズはティアナの額に男の割に柔らかな唇を一つだけ落とした。それは一瞬ではあったが、彼女の時間はこれで止まった。

「今日は休め、上官命令だ。また後で、な？」

ティアナに背を向け、左手をヒラヒラと振ったブレイズは既に居ない。

残されたのは呆然とする彼女一人。握られたデバイスは今にも地に落ちそうだった。

「ククク。やっぱり面白い。此処は最高だ」

ニヒルな笑みをぶら下げたブレイズは、ゆつくりと六課の廊下を闊歩している。

早朝故にか、人が居ないのではと思わせる程に静か。その静寂を破るのは彼の足音。だが彼の靴が奏でる音はやけにリズムカルだ。

「私、見てもうたよ。ブレイズ君も中々やりよるなあ」

「やっぱり最低だ、此処は」

指揮者は指揮棒よろしく振っていた脚を止め、後ろから聞こえた煩わしいシンバルを見遣った。ブレイズの顔は酷く憂鬱そうだ。

「ブレイズ君、ティアナみたいな子がタイプなんか？」

「よく分からない。だがはやての顔を見ると胸が高鳴るんだ」

切なげな表情を浮かべ、胸を押さえるブレイズ。今日の彼は何にだつてなれる。俳優にも魔王にも、多分。

「いややわあ。ちょっと本気になってもうたやん」

「俺は何時でも本気だ」

はやてにキスが出来そうな程の距離にブレイズは顔を近付けた。顔は至つて真面目に見えるがそれすらも演技なのだろう。今日は俳優だ。

「頭、冷やさそうか」

「……本当に最悪だ、此処は」

首筋に当たる冷やかな感触に、ブレイズの身体は冷えた。対するフェイトは笑っていた。

今日はやけに笑顔を見る日だ。

くだらない事を考えながらブレイズは、後で説教を垂れるフェイトと、それを諫めるはやての声を遠くで聞き、未だ脳裏に残るテイアナを思い出す。

(此処は最高だ。これから陸も、海も面白くなりそうな気がするぜ)

決して合間見える事のない海と陸を想像し、ブレイズはくだらない思考を空へと飛ばした。

4th Gravity (前書き)

この話、Cheap故に、読者の方には最大限の注意を喚起中。
頑張れ、俺。

4 t h G r a v i t y

彼は此処に居た。たまたま上官、いや元上官命令が彼に下ったから。しかしそれすらもはや運命と言う歯車の一つにしか過ぎない。

もう後戻りは出来ない。運命は動き出した。その重力で以って数多の人間を引き寄せ、歯車に組み込む。悪戯が過ぎるか。誰も重力に抗う事は出来ない。地に足を着けて立つ事のように。それは簡単で至極複雑な故に。だからきつと彼は重力に引き寄せられたのだ。だが企画外の大きさの歯車であつたという事は、運命云々を抜きに、誰も分からないだろう。

彼の寝起きは酷くスマートだ。目覚まし時計を叩き寝る。先ずはこれを三回程繰り返した後、記念すべき四回目には、時計は重力に逆らう事なく地に落ちた。丈夫そうな作りではあるが、見た目はベコベコだ。

そしてカーテンを開けるなんて事はしない。彼はカーテンを閉めないからだ。そして光を浴びながら元々余り良いとは言えない眼を酷くスマートに細める。

歯を磨く。格好は勿論下着一枚。磨き終えた後は一服。だからだろうが、カーテンを閉めたがらないのは。彼は黄色より白が好きな筈なのに、そのカーテンは黄ばんでいる。

一服を終えた後はゆっくりとスーツに着替える。どうやら今日はグレーな気分のようにだ。ワイシャツは薄く水色が掛かり、ネクタイは黒、銀、灰と三色のストライプ。勿論髪型も無造作ヘアーからし

っかりと整えた。

散らかった いや、物の出し入れがしやすいように全ての物が
出ている部屋を出て、ちんたらと降りるエレベーターから颯爽と車
へと飛び乗る。

彼は車を二台持っているが、今日は黒のスポーツカーらしい。エ
ンジンを掛け、けたたましいノイズと共に車は颯爽と飛び出して行
く。

カーステレオからは彼お気に入りの音楽が、年配の方にはお勧め
出来る音量で流れ出る。

そして彼は今日も飛ばして行く。朝から風を感じる彼は恐らくナ
イスガイ。

「うん、取り敢えず頭、冷やして」

「その……すまないと思う」

スマートなブレイズは正座していた。着た時の皺一つ無いスーツ
は既に旅立った後。今は膝小僧が皺を作ろうと一生懸命だ。そして
ワイシャツは嫌な汗を一生懸命に吸い取るのだ。この場に居る限り
この汗が乾かない事を分かっているにも関わらずに。

「だらし無いわあ、ブレイズ君。今日はブレイズ君のお披露目やか
らね、しっかりしい」

「おいおい。聞いてないぞ、そんな話」

頭を自分で冷やしなからブレイズは努めて冷静な口調ではやてへ
と言葉を放った。彼は自己紹介が嫌いな訳ではない。自己紹介には
新たな出会いがあると信じてやまないからだ。ただ、予定外、想定

外の事が嫌いなだけなのだ。

「そらそうやる。今初めて言ったからな」

からからと笑う自分より小さな少女を殴り飛ばしたいと思ったのは、ブレイズは初めてだった。彼は幼児虐待などといったサディステックでバイオレンスな行動は嫌いだからだ。

溜息を零し、現実に諦めをつけた彼の脳内は既にスイッチが切り替わっていた。

「ブレイズ君。急に真面目な顔をしてどうしたの？」

なのはが続けて具合でも悪いのかとブレイズに聞くが、その優しさはブレイズという壁の前に無惨にも平伏す。

「なに、可愛い子が居た時のシュミレーションをしていたんだ。模擬戦は本番の為に必要だからな、どんな事であれ」

何時だって準備を怠るもんじゃない。

得意げな顔で言うブレイズに諦めに近い感覚を覚えたのはなにもなのは一人ではない。六課の課長は何となしに頭を掻き、金髪執務管は手で眼を覆い、黙って顔を仰いだ。

空気を読むといったレアスキルを彼が有する筈もなく、そういえばと三人を順に見遣り、次の言葉を紡いだ。

「ティアナ、だったか？ 彼女は何であんなに頑張るんだ？」

ブレイズの言葉は実能的を射ていた。

身体に着実に蓄積された疲労、強きな表情から僅かに感じた焦燥感、劣等感、瞳の奥に燈る固い決意。そのどれもがティアナという少女を成長させていると同時に苦しめていた。長年と言うには些か

短い、今まで培った経験によって彼の瞳は適当な人間より数段肥えている。彼の観察眼なればこそと言えるだろうそれには、鎖に縛られた切なげな少女に映ったのだ。

「……自分のお兄さんの実力を、引いては自分の実力を証明したいって……」

教え子を見守る教師の様に優しくも厳しい表情で紡がれたなのは言葉は、ブレイズを黙らせるには随分と過ぎたモノだった。

「頑張る事はいいけど……けど、何時か自分で分かってくれらるって私は信じてるよ」

なのははそう告げ、ゆつくりと部屋を出た。

ブレイズの瞳は彼女の優しい背中を追い、扉が閉まるのを最後に彼の瞳は閉ざされた。何を考えているのかを計る術は無いが、珍しく真面目な顔だとフェイトは驚きながらも彼を見た。

「何だかな……」

その表情から呟かれた言葉は疲れた様にも、呆れた様にも感じられる。

(何れ一悶着有りそうだな、あの二人なら)

勝手に肩を落とすブレイズに、はやてとフェイトはお互いの顔を見合わせ小首を傾げたのだった。

「ブレイズ・イエーガーだ。暫く厄介になるが余り気にしないでくれ。以上だ」

スマートに。しかしスマート過ぎる挨拶に勿論その場に居た人間には上手く理解しがたい物になってしまった。余計な肉を削ぎ落し過ぎた骨は、歩く事すらままならない様。

「イエーガー……」

ティアナは額を摩りながら新たな仲間のファミリーネームを零した。

イエーガー執務管。勤務態度は不真面目で書類の日限をこれっぽっちも守らないいい加減な執務管。だが同時に、任務の成功率に関して言えば抜群。どんな任務に就いたかは余り知られていないが、やたらと過酷で毛嫌いされる任務が多いという事をティアナは記憶している。そんな彼の、出身地は疎か魔導師ランクすら非公開の個人情報、査察部のブラックリストに記載されていると言われる程に噂されている。よくもこんな出鱈目な人間が執務管になれたものだ。ティアナは鼻で笑った事を思い出す。

イエーガーに反応した人間は彼女だけではない。他の人間も少しは聞いた事のある名だからだ。

イエーガーと言われて真っ先に思い出すのは際立つ煙草の煙並に中毒に陥りそうな二つ名。

「ちなみにあだ名はInsigniaだ」

気を付けるよ？

暗に放たれた言葉に意図された気を付けろという意味合い。

彼の任務は局内では殆ど知られていないと言っても過言ではない。しかし噂があるのだ。

彼の様々な任務の内の半数が局員を捕えるという事。局員殺しだ。

その洞察で以って裏を取り、鷹の眼は獲物を捉え、鉤爪を徐々に黒い人間に食い込ませる。そしてたまに逝き過ぎてしまうというもの。残念な事に噂はその実、事実であった。だから皆、彼とは距離を置く。

そして、本来は査察部や鑑査の人間がやるべき事を何故彼がやるのか。それを彼は誰にも打ち明けない。

そんな彼をティアナが鼻で笑うのも無理はない。そんな事など執務管のやる事ではないからだ。故に局内では、Insightと共に、役立たずのイエーガーで名が通っている。こんな出鱈目過ぎる人間が何故未だに局に所属出来るか分からないからだ。

一際目立つ新たな仲間を見遣る周囲の人間の視線は冷たかった。

「お前が気にする事じゃない。そうだろ？」

頭に優しく置かれた手はブレイズの左手だった。そして思い出す。彼は何時も利き手を使わない事を。それを彼に聞いた事もあった。だけど何時も上手くはぐらかされてしまう。私は彼とは違って口下手だったから深くは聞けないでいた。きっとこれからも変わらないと思う。

「フェイト。そんな顔されると辛くなっちまうだろ」

「……本当の事を話したらきつと皆だつて」

私はハツとして言葉を止めた。ブレイズはそれを望んでいないから。彼は誰もやらない様な過酷な任務を幾つもこなす。皆は気付い

てない。彼がどれ程苦しい任務をしているか。それが悔しくて泣いてしまった日もあった。

「何でかな……お前に甘えなくなっちまうのは」

泣き出しそうな笑顔で漏れたブレイズの言葉は、簡単に宙へ溶けた。

きつと昔も今も、これからは分らないけど、彼が甘えるのは私だけなんじゃないか？

「甘えていいよ？ ほら」

高い位置にあったブレイズの頭を、手を伸ばして抱きしめた。身長差から、抱きしめられているのは私かも。だけど抱いてるのは私。ブレイズは私の背に腕を回し、きつく私に縋り付く。

メンタル面でもタフに見える彼だけど、本当はもうボロボロだって事を知っている私にはこれくらいしか出来ない。けどこれで彼が救われるのなら、私は幾らでも彼を抱きしめる。

そんな事を考えながら、私はブレイズの熱を体で感じていた。それはとても心地良かった。

互いの熱を感じ合う二人。それを見詰めるのは一人。

「ああ……ほんま、熱々やん」

物影から隠れて見ていたはやてではあったが、もはや見るのは諦めた。何故か虚しくなってきたからだ。

「ええなあ。私も……」

別にブレイズが好きという訳ではないが、彼に抱かれる自分を想像し、はやては勝手に悶えた、全力で。

「……たまらん」

鼻息が荒い。目付きが可笑しい。身体が僅か震えている。少々涎れが垂れている。

はやての妄想の中では、ブレイズは相当いかがわしい事を彼女にしているらしい。

踊る舌に喜ばされるはやて。耳に触れる暖かい吐息。それははやての身体を震わした。吐息を感じて間もなく、首筋に吸われる感覚。僅かな痛みを感じたが、彼女にはそれすら甘美なモノ。次いで脱がされる彼女の下着。綺麗だ、と呟かれた言葉に身体が一瞬跳ねれば、ブレイズははやての純潔を守る最後の一枚に優しく手を掛けた。

「お願いや、私、初めてやから。だから痛くせんといて？　ハッ?!」

我に振り返り周りを見渡すも、人影は無く。遺ったモノは自身で醸し出していた淫らな香のみ。それに気付いた彼女は苦笑を零し、ゆっくりと無機質な廊下を踏み締めて自室へと歩くのだった。

(私も甘えたいわぁ……)

何故か、はやての胸には女性のそれと分かる質量に反して、些か重たいモノを感じ、だが、それに気付かない振りをしていたのは彼女自身にも分からなかった。

.

S t h I d i s s o l v e d i n y o u (前書き)

自己満足故にCheap。

C h e a p 故に駄文。

5th I dissolved in you

(オイオイ……模擬戦なんてやる暇が有るなら働けよ)

彼の心の内はきつと誰にも分からないだろう。

機動六課に組み込まれたブレイズは早くも模擬戦へと駆り出された。殆どの事に於いて謎に包まれた彼。そんな彼を他の仲間に信用させるには何かと三人の隊長は考えた、それはもうかなり。それがこれだった。

「イエーガー……本気で来い」

(ベットならな)

ブレイズの目前に佇むのははやてが絶大な信頼を置き、その身は忠義の刃で創られた烈火の将、シグナム。

彼女の眼は既に死合のそれにつき。握るレヴァンティンはブレイズの恐怖心を煽る。

「……怨むよ、フェイト」

零した言葉はブレイズの本音。次いで、不可思議な呪文を呟き、二丁の質量兵器が彼の手に握られた。

シグナムは怪訝な表情を隠す事無く、侮蔑のそれを僅かに籠めた視線で彼を刺した。

「……騎士の戦いにそれか」

「本気を出させてみる、Lady?」

シニカルな笑みをぶら下げ、堅く握られた質量兵器にブレイズは自身の魔力を籠め始めた。

腹を括ったのか、彼の眼は酷く獰猛だった。舌なめずりを一つ。それはシグナムや彼に対峙していない者でさえも背中に何か冷たいモノを感じる程。

そして背中越しの冷たさを、自身の闘志へと焚き付け、僅か口角を上げて再度彼を見遣った。

「死んでも知らないぞ?」

「なら死ぬ前に抱かせる」

突如、銃声が轟く。

開始の合図を待たずして、二人の戦士は肉薄した。

シグナムの剣撃を、ブレイズはヒラヒラと舞う葉の様に避ける。

斬れるように斬れないそれに、剣を振るう彼女は僅か奇立ちを募らせ、重い袈裟斬りを枯れ葉にお見舞いした。

銃で以って受け止めた彼は衝撃もそのままに受け止め、彼女から弾かれる。無理な使い方をされた銃は欠け、相変わらず鈍く光る。

「オイオイ……それなりの強度だけ、こいつはよ? 固定化も一応の防御魔法も刻んでるってのに。殺す気か?」

「元よりそのつもり。本気でこなければッ!」

吠えるシグナムに肉薄するのは一筋の光、煌めく剣閃。いつの間にか太刀を握ったのか、先程まで握っていた銃は何処へ言ったのか。彼女は突然吹き飛んできたブレイズを見遣る。

歪んだ口元は綺麗な弧を描き、フィールドに綺麗なシュプールを

描いたのは彼だった。滑らかに、速さだけを追求したその動き。荒々しくも、それすら恐怖に煽られる。

彼の身体からは壊れた車のエンジンの様に熱く、白い煙が立つ。

「久し振りに楽しめそうだ。スイッチも入っちゃった。後で後悔するなよ、抱かれりゃよかったってな？」

「吐かす！」

シグナムも知らずの内に弧を描いた。

そして二人は距離を取り、再度肉薄。金属のぶつかり合う甲高い音を置き去りに、二人の武器は小さな火花を散らす。

互いの刃は触れるだけで切断を容易に果たす。互いの視線の先に映る相手は好敵手と呼ぶに相応しい存在。一合一合刃をぶつけるに比例して互いの人間性を理解し始める。二人に言葉は要らず、代わりに聞こえるのは甲高い金属のぶつかり合う音のみ。

二人は笑みを止められなかった。幾ら時間が経とうと、幾ら刃を振るおうと、身体は軽く、集中力は最大に、そして燃え上がる闘志。一際甲高い音が鳴ったと同時に、モニターに映る二人の顔は、キスをするに十分な距離。カチカチと二人の刃は振るえ、鏝ぜり合いは終わりをみせない。

「……何なの？ 役立たずの筈でしょ？」

モニターに釘付けのティアナの視線は、寸分変わらず、ブレイズの笑みを捉えていた。

彼女は彼特有の笑い方が余り好きになれないでいた。酷く獰猛で、今にも捕って喰われそうなそれに。そしてその笑みを見る度に揺れる自分の視線も、だ。

「……Insight、貴方は一体……」

切ない吐息混じりに何故か呟かれた言葉に、ティアナは思考を一瞬奪われたものの、後方に跳躍して距離を取った二人の御蔭で自分を思い出した。

「主はやてに仕えるヴォルケンリッターが一人、剣の騎士、烈火の将　シグナムだ。そしてこれは私の誇り。炎の魔剣、レヴァンテイン」

「なら、俺はブレイズ・イエーガー。こいつは……そうだな、俺の誇り、大太刀、月夜鴉」

敢えて名乗ったのは、相手の実力を認め、好敵手と認め合ったからか。

未だ終わりが見えないこの模擬戦は、ほんの挨拶代わりに。自己紹介と握手が済んだ後、二人は握る得物に力を籠める。

「こっからが腕の見せ所ってやつか」

シグナムに対し、ブレイズの構えはやはり独特なそれ。怪訝に思いつつも、彼女はその眼に彼を捉える。

彼の言う通り、正しく此処からが本番とばかりにフィールドの表情が一変する。例えるならば暗雲に煌めく雷光の様に、二人には何かがほとばしる。

そして、模擬戦とはいえ、本物の闘いの気に心が奪われそうになる。殺気、覇気、威圧感。言葉に表すには少し難しい雰囲気、既

に二人は身を投げ、モニターを見詰める面々も、僅かにかいた掌の汗に気付く事もなく、眼を奪われる。

「逝く！」

シグナムの一言と同時に、二人は駆け寄る。恋人同士、尚且つ此処がそれなりの場所であれば微笑ましい状況。しかし実際は笑える筈もなく。

置き去りにした音が後ろに聞こえ、蹴った地は陥没し、手に握ったモノは恋人同士が持つモノではない。

今までに無い程の甲高い音が聞こえたと同時に、生憎と解像度の低いモニターに漸く二人が姿を現す。

「……速い」

はやては思わず零した。ブレイズには驚かされてばかりでいつも一言零す自分に苦笑し、そういえばいつも苦笑いだと気付いた彼女は再度苦笑も零した。

モニターに映る二人の間には交わす言葉は無かった。交わすのは剣撃。撫斬りにしる袈裟斬りにしる、だ。

「月夜鴉とは何だ？」

「月夜に浮かれる馬鹿な鴉だ。血で身を染め、自分の色を忘れちまった鴉だよ」

互いの剣撃を避けながらも、互いに剣撃を放つ。久し振りに交わされた言葉はやはりか、物騒な話ではあるが、これ程の闘いの最中に話すそれではない。

「鳴き声は甲高いのだな！」

「ベットじゃ別、だッ！」

繰り出した心臓を狙ったブレイズの突きは、間一髪、シグナムに払い落とされた。

その突きの速さに着いてきた彼女に驚いたのは彼だけではなかった。フェイントを見抜き、的確に切っ先を払う技量には、やはり眼を見張るものがあると同時に、彼女の力量を窺い知るには十分。

「一筋縄じゃ逝かないか……いやあ、次で決めるしかないか」

払われた太刀を無理矢理シグナムへと払い、強引に距離を取ったブレイズの眩きと同時に、彼の右腕は大きく脈を打つ。

「あれって……」

なのはやフェイトには見覚えがあった。ガジェット相手の模擬戦で見せた鼓動を。

初見の面々はやはりと言つべきか、自分の眼に映る現実を信じられないでいた。

爆発的に気が右腕に満ちる。

右腕が震え、彼の持つ太刀は鳴っていた。

「本気、という訳か……」

感じ取ったシグナムは自身の持つ最高の技を出すべく、集中力を高め、笑みを浮かべた。

こんなにも楽しい闘いは何時以来だろうか？

彼女の闘いの記憶に幾ら照らし合わせても、これに勝るとも劣ら

ない闘いは殆ど無いと言ってもいい。

最初は乗り気ではなかった今回の模擬戦。始め、銃を握るブレイズを嫌いではないが好きにはなれなかった。

銃が悪い訳ではなく、戦士、尚且つ剣の騎士である自分相手に銃など馬鹿にしているのかと思ったのだ。別に銃を馬鹿にしている訳ではない。単に、戦士として戦うのに銃か、という事だ。また、適当に銃を構えた当たり、相手の力量を推し量れない奴なのか、と。

しかしそれは彼女の杞憂に過ぎなかった。スイッチが入った彼は、何時の間にか太刀を握りしめ、楽しそうにそれを振るう。

純粋な騎士の闘いに彼女は歓喜し、好敵手と認めてもいいとすら思ったのだ。

そして好敵手なればこそ、自身の持つ全力で彼を倒す。騎士としての彼女は、集中しながらも、再度笑った。

「疼くんだ、早く殺らせろってな。加減は出来ない、全力で来いよ」
二人を取り巻く気は、既に無い。それは二人が中心となっているからだろう。

シグナムは肌が焦げる感覚を覚えた。

ブレイズは鼓動が速まり、右腕が一際疼いたのを感じた。

彼女は深呼吸をし、最大の技を繰り出そうと、全身に全力を籠めた。

「紫電ッ」

ブレイズはシグナムへ翔けた。音を置き去りにし、残像すら残さないそのスピード。もはや地を蹴るのではなく、宙を翔けた。

「一閃ッ!!!」

そして放たれたシグナムの技。ブレイズを倒そうと、それは彼に

届く筈だった。

「生憎、何があるうと何処であるうと相手が誰だろうと……負
けられないんでね」

意識を失う寸前か、それともその更に前か。どちらかは分からないが、シグナムの耳にはブレイズの寂しそうな声がしっかりと届いた。

「……………う……ん」

目覚めた先には知らない天井。いや、知った天井だ。

定期的に聞こえる機械音が、気絶云々ではなく、純粹に眠気を煽る。それを回避すべく、シグナムは視線を周りへと向けた。その先には揺れる金髪。染めたのかどうかは彼女に到底分かる筈もないが、やたらに柔らかかそうなそれを一束手に取った。ワックスでも使ったのか多少手がべたつくものの、柔らかさは余り損なわれていなかった。

これを枕の中身にしたら気持ち良いんじゃないか？

彼女にしては珍しく馬鹿げた事を考えた。そして自分に苦笑を頂戴させたと同時に、枕の中身にされそうだったその持ち主は顔を上げ、彼女へと視線を向けた。

「痛むか？」

単刀直入に紡がれた言葉は今度もしつかりとシグナムの耳へ届いた。単に自分を気遣ってか、それとも一応の形式張ったそれか判断が出来なかったが、首を縦に振る事で答えた。

「……そうか」

なら、よかった。

ブレイズは後一言を漏らさない事にした。何故だか分からない。医務室特有の消毒薬等といった薬の匂いのせいで頭が痺れているのか、シグナムの髪から香る、実は甘ったるい匂いに痺れているのか。定かではないが、この空間が少し気持ちいいと思った自分が恥ずかしかった為に、一言だけ飲み込んだ。

彼女は彼の一言だけを聞き、自分を気遣ってくれたのかと察した。彼の言葉を聞かなくても、微妙にソワソワした視線を見れば分かったかもしれないが。

「……そういえば」

最後に聞こえた言葉は何だったんだ？

シグナムの問いに頭を掻きながら聞こえてたかだとかしまったと零すブレイズに、彼女は笑ってしまった。

「何笑ってんだよ」

そして互いに笑った。

二人だけの空間はやけに暖かく、脳がそれ以上考える事を放棄する程に蕩けてしまいそうになった。

「……入りにくい」

言葉は、医務室の扉の向こうに呟いたものだった。惜しくも扉に跳ね返されたが。

「心配する必要なんて、ないよね？」

シグナムの調子を窺ったのか、恋人でも何でもないブレイズをそ
ういった意味で心配したのか。

きっと呟いた本人も分からないであろう言葉は既に存在を消した。

「何の話、してるんだろ……私のほうがブレイズを知ってるんだよ
」？」

今度呟かれた言葉は、嫉妬。黒く燻る火種は未だ可愛いげのある
もの。

仕事、しなくちゃ。

金髪を揺らし、赤い瞳は扉から視線を外し、ゆっくりと廊下を歩
いて行った。その背に笑い声を聞きながら。

I d i s s o l v e d i n y o u .

(だけど今日は手遅れ)

6 t h D o g f i g h T ? (前書き)

注意喚起中。

キーワードをよく読み、少しでも思いつくところがあったならば、**回れ**
右が無難かと。

「……………ハア」

溜息は重く、局の無機質な床に落ち、綺麗に霧散した。

やや自分の肩が重いという感覚を無視して今日の訓練に思考を向けていた。

(はやてとなのはとフェイトと……………あとシグナムとティアナか)

昨日はシグナムとの模擬戦の御蔭で、その前も模擬戦の御蔭で。ブレイズは未だに機動六課の面子にまともな挨拶をしていない。彼はボディランゲージは得意ではない。寧ろ酒を飲みながら昔話を肴にするノミネーション以外は受け付けない、主に体が。ただでさえコミュニケーションが苦手だというのに、だ。

床を叩く靴音が心地良く広過ぎない廊下に響く。そのテンポのいい音色は彼の頭痛の種を少し取り除くと同時に、音色に酔えば訓練室に近付くという避けられない現実。

「どついたらいい?」

曲がり角から、空調機に依る空気の流れに乗って香る甘い匂いに脚は止まり、鼻を鳴らした。

やっぱりイイ女だ。

此処は消毒薬の匂いがしない為にブレイズの頭は痺れる事は無かった。頭痛は現在進行形で止む事は無いが。

「何の話だ？」

「……シグナムを口説く方法さ」

左手をヒラヒラと振り、シグナムとの簡単な挨拶を終わらせようとしたのだが、ブレイズの肩はしっかりと彼女に掴まれてしまった。

「私は手強いぞ？」

「お互いに冗談が好きだねえ？」

酷く挑戦的な笑みに、男として欲情的な作用が働いた。間近にある端正な顔立ちに酔いたかったブレイズではあるが、今はこの頭痛を一刻も早く除去しなければならぬ。その為なら、今の彼は脳に直接ダイバインバスターを喰らわせてもいいさえ思えた。

腐っても男な彼は、頭痛と戦いながらも、優しく彼女の頬へ噛み付き、可愛いリップ音を彼女へとプレゼントした。

「今はこれで満足だ。ベットに誘ったら負けっつてのは知ってるんだ」

「馬鹿者ッ」

僅かに頬を朱に染め、僅かに潤ったそこに手を宛てがったシグナムは漸くブレイズを解放した。

そして彼は再び歩き始めた。頭痛のする方へ。

頭痛は悪化した。本当に此処はどうかしていると。

「何でガキが居る？ 此処はファンシーな遊園地じゃない、ジェットコースターで死人が出るんだぞ？ 身長制限は守ったのか？」

「じゃははは……」

ブレイズの隣に立つのはは笑うしかなかった。彼の言う事も尤もだからだ。それに彼女も小さい頃からジェットコースターに乗っていたから。死んではいないが、確かに怪我はした。

「けどこの子達なら大丈夫だよ。私だけじゃなくてブレイズも居るんだから」

「……嫌な気はしないが、嫌な感じだ、此処は」

やれやれと肩を竦め、こんな事なら一服でもしてくれば良かったと、胸ポケットに詰め込んだ煙草を一瞬見遣った。

ニコチンから人畜無害な笑みを浮かべる新人をブレイズは見る。

「……ブレイズ・イエーガーだ。俺は君達の事を知らない。だから名前を教えてくださいませんか？」

「……ティアナ・ランスター」

「上官命令。ちゃんとした自己紹介をしろ、もう一度言っ、上官命令だ」

額に手を当て、大袈裟に溜息を吐いて疲れたブレイズの視線は、

ティアナを突き刺す。

少々後ろめたい気持ちを隠したティアナは隣に立つ同年代である少女へと視線を逸らした。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！ 宜しく願います！」

ブレイズは思った。苦手なタイプだと。嫌いな訳ではない、寧ろ好意を抱ける存在だ。しかし、だからといって得意という訳ではない。

彼には一目で分かってしまったのだ。きっとスバルという少女の瞳に見詰められたなら、自分は嘘を言えないと。冗談をよく言う彼ではあるが、それを真に受けられると多少困ってしまう故に。

「スバル……いい名前だ」

撥ったそうに笑ったスバルにブレイズは癒された。頭痛も今では見る影もない、あれ程までに悩んでいたにも関わらず。所詮、彼という人間はそこまでできた訳ではない。

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」

「キャラ・ル・ルシエ三等陸士です」

次に名乗ったのは随分と小さい戦士。眩し過ぎる無垢な笑顔に、つつい笑みが零れてしまったのはブレイズだけではない。後に控えるなのは母性愛に近い感情が見え隠れする視線で二人を見ていた。

その笑顔に次いで彼を襲ったのは、こんな年端もいかない子供を戦場に駆り出す事に対する呆れ。

彼は仕事は嫌いだ、最低限の事はしっかりと分別している。毎年局員を新たに採用はしているが、仕事がついに、又は殉職という

形で此処を去る人間も居る。更に言うなれば全く仕事をしない腐った蜜柑も居る。その為にいつも人手が足りないのだろう。だが、それで子供を雇い入れていいかと問われれば、彼は鼻で笑いながら馬鹿かと罵るだろう。

「いいか、エリオ、キャロ。局には馬鹿が多い。変な事をされたらちゃんと俺に言うんだ。そんな奴、俺が消し炭にしてやるから」

二人の目線に合わせてしゃがみ込み、頭を撫でながら優しく物騒な事を言うブレイズを、なのはは優しく見ていた。

きつとブレイズ君は親馬鹿だ。

「よし、後はお前だけだ、ランスター」

立ち上がり、子供を見ていた眼は既に無い。

無表情で見詰められ、ティアナは嫌々という感情を隠さず、至極簡潔に答える。

「二等陸士です」

「まあ、今はそれでいい。だが」

ブレイズはティアナへと近付き、何時の間にか握られた銃を彼女の額へ突き付けた。

瞬きをする程度の自然さに、彼女は一瞬何が起きたか分からなかった。

額に感じる固く冷たい感触に自分を取り戻した彼女は、彼へ退けるよう視線で語る。

「此処が戦場なら俺はお前の頭を綺麗な薔薇に変えてやれる。俺は

上司、お前は部下。分かるか？ 命令違反はお前だけじゃなく、仲間の命も危険に曝す事になる。今此処には死なんてものは無いが、糞みたいな命令も聞けない糞野郎は、きっと糞みたいに死ぬ。分かったか、糞野郎」

浴びせたいだけ辛辣な言葉を浴びせたブレイズは、握られていた銃を消し去り、四人を順に見遣り、シグナムとの模擬戦で見せた目付きで四人を刺した。

「この課にもう糞野郎は居ない筈だ。そうだろ？」

「はいッ！」

計ったかの様に重なった返事に、ブレイズは厳しい目付きを和らげた。

後ろに佇んでいたなのはにウインクを一つくれた彼は少々滑稽だ。

これで緊張感のある訓練が出来そうだ。

なのはやフェイト、はやては厳しいと同時に優しさがある。それは普段の彼女達の様子を見れば容易に想像が出来る。しかし彼はその優しさの人並に持ち合わせてはいない。それは彼の今まで生きてきた人生に依るものなのかもしれない。

「さあ、訓練を始めよう。今日は俺が指導する。なのはみみたいな厳しい訓練じゃない事を俺に祈れ」

「さあ、始めるぞ」

獰猛な笑みだった。間近で見ってしまったのは子宮が疼いた。何故なのかは彼女には分からなかったが、それは人類にとって必要な感覚なのかもしれない。いや本能とも呼ぶべきか。

「課題を忘れるなよ。失敗しても文句は言わん、だから安心して逝ってこい」

役立たずのくせに。なめられたもんね。

ティアナの心中を渦巻くのは嫉妬と怒り。何故こんなにもいい加減な人間が執務官なのか。課題だとか、自分をなめてるとしか思えない、と。

彼女自身、過信をしている訳ではないが、もう少しまともな課題で、尚且つなのはに教鞭を振るって欲しかった。それが何処の馬の骨とも分らないいい加減な執務官で、課題はガジェットを全力で破壊しろ。下らない、と彼女は鼻で笑ってみせた。簡単だ、と無機質な床を盛大に踏みじった。

だが彼女は気付いていない。それすらもブレイズの掌で踊らされている無意味な感情だという事に。

「さあ……魅せてくれよ、ヒヨッコ共」

ブレイズの浮かべた笑みは、悪戯めいたそれではあるが、眼差しは鋭利な人殺しのそれだった。

.

7th S a d d o g f i g h T

? (前書き)

駄文投下。

「その課題で何が分かるの？」

なのはは首を傾けながらブレイズへと向き合った。そしてその疑問は至極真つ当なもの。

ガジェットを全力で破壊しろなどという、意図の有無すら分からない課題。

「なに、ひよつこの実力を知りたいだけだ」

再度首を傾げるなのは。ブレイズの言う事に一理は有るが、実際に自分で戦ってみればいいとも思った。

彼女の言わんとしている事が分かったのか、彼は至極鋭利な視線でひよつこを見遣り、言の葉を生む。

「INSIGHT 故に見る眼はあるつもりなんでね」

正直、面倒な事が嫌なだけだとは言わない。

(スバル！ さっさとこんな茶番を終わらせるわよ！)

ティアナからの念話に何時もと違う何かを感じ取れたのは、長年の付き合い故にか。呆れを含めつつも明確に感じ取れる感情は怒り。この訓練を茶番だと言っている当たりからも十分に察する事も

出来るが。

(分かった！)

だが特に何かを言う必要もないとスバルは無意識の内に判断をした。

ウィングロードを翔け、シューティングアーツで以って次々とガジェットを撃破していく。ティアナも巧みな幻影魔法を使い、ガジェットを撃墜していく。

エリオ、キャロの二人も年齢を感じさせない動きでフィールドを制圧していく。

だが、この男は違った。

「全力云々はどうでもいいが……予想よりも鍛え上げられているな」

「でしょう？ 私の指導がいいからかな？」

ブレイズの溜息とガジェットの撃墜される音が重なった。

「なのはの指導が良ければティアナはもっと俺に優しく出来る筈だ」

そうだろ？

肩を竦めて、縋るかの様な視線で、なのははブレイズに見詰められる。

しかし、彼の意味の分からない言動を相手ににやはと苦笑で受け流す彼女は大物だろう。

「基礎は中々。後は応用に経験、メンタルは俺等が見てやればいい」

今日一番の真面目な言動を選んだブレイズは、震える携帯電話を手に取り、眉間に皺を刻み込む。

「どろしたの？」

「いや、野暮用だ」

そう言っつてその場を立ち去ろうとするブレイズだったが、一度立ち止まり、最後にとばかりになのはへ笑いかけた。

「本当は あいつ等には戦って欲しくねえ。不甲斐ない”俺を”許してくれと、何時も思う」

「……え？」

ブレイズの言わんとする事はなにもしつかりと伝わった。彼女達には普通に学校に通い、友達と遊び、恋をして、明るい未来を夢見て生きて欲しい、と。

だが不甲斐ない”俺” 何故自身を指したのかは、なのはにはまだ生憎分からなかった。

唯一分かった事と言えば、ブレイズの瞳は哀しみの色に燃え尽きていた事だけ。

「……もしもし」

「遅い。連絡には直ぐに出ると何度も言っているだろう」

ほざけ、屑が。

だがブレイズは決してその言葉を吐く事は無い。

「まあいい、それよりもだ。本日2300に、件の場所へ。任務の詳細については追って連絡しよう」

任務。その単語にブレイズのこめかみが数回痙攣を起こす。そして周囲を見渡し、彼はそれこそ人知れず溜息を零し、調子に乗って煙草へ火を燈す。

「了解。俺は生憎、何時でも逝けるんで、ね」

皮肉と取れない皮肉をやんわりと相手の耳元へ。

オマケだと携帯に煙草の煙を吹き掛けるのはブレイズ自身滑稽だと笑った。

「そうか。今回”も”素晴らしい働きを期待しているぞ、ブレイズ君」

「分かっていますよ、レジアス中将閣下」

相手が電話を切るより早く携帯電話をポケットへ押し込んだブレイズは、煙草を靴裏で思い切り潰した。その顔は、煙草ではなく苦虫を噛み潰した様に酷く歪む。

そして彼の周りだけ空気が圧迫された。

「……屑は、俺だ」

零した言葉に膨れ上がる殺気の塊、ブレイズの右腕。

転移魔法で姿を消す前、彼の右目は血の色に染まっていた。

「何なのよ、あいつはッ！」

ガジェットを破壊しろという課題に、苛立ちながらもしっかりとティアナ含む新人四人は見事とでも言うべきか、課題をクリアした。

だが課題を終えてみれば、それを与えた当の本人は急用と、忽然と姿を消したのだ。ティアナが余計に苛立つ筈だとスバルは苦笑を零す。

「まあまあ。ブレイズさんも執務官だし忙しいんだよ、きっと」

「何が執務官よ！ INSIGHTのくせに！」

ティアナは自身の枕に一発拳を頂戴させ、額を押さえた。

突然に静かになった相棒に、スバルは気遣うが、ティアナは何でもないと言気を強めるに留め、もう一度だけ額を撫でた。

(だけどあいつ……泣いてた)

決して涙を流していた訳ではないブレイズ。だがティアナは何かを感じ取った。泣いている、と。

彼女はブレイズの何気ない笑みを思い出し、もう一度枕を殴ったのだった。

ティアナが枕を殴った同時刻。ミッドの郊外にある、廃墟と化したビルの屋内で、男が随分と情けない声を出し、地を這いずり回っていた。

「ヒイイ！　だ、誰か、助けてくれ！」

汗を文字通り滝の様に流し、男の服は泥と血で汚れ、眼は見開かれ。四肢は痙攣し、男の顎は上下に耳障りな音と共に小刻みに揺れる。

深夜、そして廃ビルと、男の助けに耳を貸す者等当然のように居ない。

「たた、た、頼む！　殺さないで、くれッ！」

息も絶え絶えになりながら、必死に懇願する男。煙草の煙と共にその男の前に立ち塞がっていたのは、スーツを中々だらし無く着込み、右手に太刀を握る人間。

「俺はブレイズ。今からお前を殺す男だ」

淡々と、明日の天気は晴れだとも言う様に、至極つまらなそうに宣ったブレイズ。

男は尚も助けてくれと懇願するが、彼の名を聞いた途端、瞳に絶望の火を燈す。

「ブレイズ？！　まさか、あんたがッ　！」

それ以降、男が声を出す事は無く、飛んだ何かが地へ落ちた音だけが響く。

「そうだ、俺がEREBOSだ……まあ、世の中知らなけりや善かった事もある」

鼻で笑い飛ばしながら、死んだ男を視界に捉える。死海へ逝かせ

たのは己。何れそこに逝くと願い、老い先短くなつた煙草を男だつた肉塊と血溜まりへ放り投げ、左手を翳す。すると不可思議な紋章が浮かび上がり、ゆっくりと男だつたモノは黒い焰に包まれた。

「なに、直ぐに会うかもしれないねえだろ？ だから俺の名を忘れるな」

誰に告げたのか。恐らくは今己の手で絶つた男に対するブレイズなりの懺悔か。

「 See you later」

またな。

今までと違い、随分と親しげに最期の挨拶を口外し、煙草に火を決して下を見ず、前へ向けられた瞳は強く、だが、泣いていた。

ブレイズの背中を見詰める黒い焰は、何かを待つようにモノの燃える匂いを辺りにばら撒いたのだった。

8th Dirty dog fights

? (前書き)

類を見ない程の駄文投下。キーワードに注意。

ブレイズが機動六課に着いた頃、もはや朝がすぐそこにまで迫っていた。

今日は眠気と模擬戦か、と煙草の火を灰皿で揉み消し、車から怠そうに降りた。

眠気で覚束ない足元ではあったが、勝手知ったりと自身に宛がわれた部屋へ歩き向かう。

「まずはシャワーだ、熱いシャワーがいい」

部屋に無事に着いたブレイズは、ネクタイを怠そうに緩め、上着をソファーに放り投げた。しかしコントロールが悪かったのか、ソファーが上着をキャッチする事はなく。

「少し使わなかったくらいで拗ねるなよ　　オイオイ、何の冗談だ？」

呆れか、若しくは疲れが。それらが混じって出た言葉は、ソファーに寝苦しそうに横たわる金色に向かつて放たれたもの。

額に手をあて溜息を一つ。ブレイズはゆっくりと緩慢な動作で金色に歩み寄り、肩を優しく、これもまた緩慢な動作で揺らす。

「起きろ、フェイト……もう朝だ」

しゃがみ込み、フェイトの顔に視線を合わせたブレイズ。彼の何

度目かの攻撃に、漸く彼女の睡眠という城壁は崩壊した。

「ん……あれ？ ……何時帰って来たの？」

「今だよ。おはよう、眠り姫」

眠そうに眼を擦るフェイトに、たまたま目に入ったブランケットをやや乱暴に掛け、ブレイズはシャワーを浴びる為に、そこかしこにワイシャツやらネクタイを放り投げていった。

「それで、何で俺の部屋なんか？」

幾分鮮明になった意識によくやったと褒めながら、バスタオルをフェイトの対面にあるソファーに放り投げた。だがまたもソファーが上手くキャッチ出来なかった為、ブレイズは渋々とそれを拾い、フェイトの隣に腰を落ち着けた。

「その前に服を着なよ。風邪、ひいちゃうよ？」

ブレイズは何時も風呂上がりやシャワーを浴びた後は上着を決まっつて着ないのだ。それはただ単に彼が暑がりだからと。

「熱いんだ。それに何時もお前は喜んでなかったか？」

「風邪ひいちゃえ、馬鹿」

そっぽを向き、フェイトは久し振りに見たブレイズの上半身を瞼の裏に浮かべた。

また引き締まってる。けど、傷が増える。
そこに厭らしい感情は無く、あるのは寂しさ。

「それで……何で此処に？」

フェイトのやや寂しげな表情が目に入ったのか、彼女の煎れた珈琲を口に含み、半ば無理矢理に再度問い掛けた。

「ブレイズが居ると思って来たんだけど、居なかったから部屋で待つてようかなって」

「待つてる内に寝たと。まあ、有り体に言えば有りがちなパターンだな」

微かに笑ったブレイズは、フェイトの煎れた珈琲に舌鼓を。そして替えのワイシャツに袖を通しネクタイを緩慢に身に付けた。

「ちょっと曲がってる」

「ああ、悪いな」

微妙なズレに気付いたフェイトは長年夫に連れ添った妻の様に、ゆっくりとネクタイを直し、完璧だと呟いてブレイズから離れようとした。

「あつ」

だが、自身の意に反してブレイズとフェイトの距離はマイナスへ突入する程に無くなっていった。互いが互いの心音を感じ、互いの熱を感じ、吐息が心臓を跳ね上げる。

くすぐつたい。

耳にかかる彼の吐息に身をよじれば、更に彼の抱きしめる力は強まった。

「苦しいよ……ブレイズ」

言葉と裏腹に、フェイトは優しくブレイズに笑った。彼女の腕も彼同様、自身より大きな背中に回され、優しくその背を撫でた。

「悪い。少しでいい、お前の時間をくれ……」

こんな時でも中々弱音を吐かないブレイズに苦笑を零しながらも、フェイトも抱きしめる力を強め、彼の心音に耳を澄ます。

そういえば、と彼女は彼の心音をBGMに、ゆっくりと昔を思い出すのだった。

「もう。一体何時になったら帰ってくるんだ、馬鹿」

ブレイズとフェイトが付き合って未だそれ程時が経っていない頃。突然何の連絡も無しに居なくなつた彼を待つ為、彼女はブレイズ執務官とプレートに書かれた 所謂彼の部屋へとやって来た。

ソファアに座り、自分が我が儘を言つて買わせたクッションに顎を寄せ、詰まらないミッドのTV番組を見遣る。

「日本のTVは面白かつたなあ」

漠然と感想を述べる。誰かがその眩きを拾う筈もなく、それはひっそりと世界から姿を消す。

飽きたとばかりにTVから視線を外し、ゆっくりとブレイズの部屋を見渡した。少しずつ、二人の思い出の品が増えてきている事に、フェイトは照れ臭そうに笑った。

色違いのマグカップに、今自身が抱いているクッション。お揃いで買った、やや無機質だがセンスが感じられるデジタル時計。そして、二人で一緒に写る写真。

最後に写真を視界に捉えた彼女はクッションに顔を埋めた。

どうしよう。私、凄いだらし無い顔してる。

恥ずかしさ故にか、頭を左右に振る事で消火作業に就くが、頬の熱は未だ燃え盛る。

「幸せだ……」

思わず零れた呟き。それが自身の脳に響く。それは何とも言い難い程に、心地よくフェイトに響いた。

その余韻に浸るのも束の間、ふと部屋の前に人の気配を感じた彼女は、漸く帰ってきたこの部屋の主人にどうやって不満をぶつけようかと笑いながら考え、扉の前に立った。

「あつ。遅いよ、もう。今何時だとおも」

入って来たのはフェイトが待ちに待ったブレイズ本人だった。彼女の姿に驚いたのは一瞬。不満を今から垂れ流そうという彼女の口を、彼は無理矢理に自身のそれで塞いだ。

「はっ、ブレイズ　ん」

優しくも、強引で、だが甘い口付けに、フェイトの脳は震えた。今までに無い程に、彼女を求めるブレイズ。抱きしめる力は壊れ物を扱う繊細な程度ではなく、蟻地獄の様に掴んだ華奢な体を、より

自身へ自身へと密着させる。苦しいと思いつながら、彼女も彼女もここまで自分を求める彼に甘美な何かを感じ、彼の期待に精一杯応えようと。どれ程そうしていたか。キスと言う程簡単ではなく、口付けと言う程優しくないその行為は、どちらともなくゆっくりと離れた事で終わった。

瞳を開いた先に居たブレイズが、何故か泣きそうだとフェイトは思った。何時迄待たせるんだと笑いながら不満をぶち撒けようと意気込んでいた筈だったのだが、彼のその表情を窺った瞬間、彼女は先程とは打って変わり、酷く優しく彼を抱きしめた。

「悪い。少し、こうさせてくれ」

フェイトは初めて聞くブレイズの弱々しい声に、大丈夫とだけ告げ、愛して止まない彼の胸に顔を埋めた。

何があつたのかと聞きたかつた彼女ではあつたが、それ以前に弱つた彼を放つて置けない、と優しく背を撫でる。

不意に視線が合った二人。

「もし浮気してたら許さないよ？ …… お帰り、ブレイズ」

「ああ ただいま、フェイト……」

優しく、優しく二人は口付けを交わした。だがこの時フェイトは、後々知る事にはなるが、残念な事にまだ”何も”知らなかつたのだつた。

「ト エイト！ フェイト！」

「えっ?!」

自身を呼ぶ大きな声に、ハッと我に返ったフェイトの目前に立っていたのはシグナムだった。シグナムは腕を組み、些か呆れた様にフェイトへと語りかけた。

「どうした。今日は朝からまるで上の空だが……」

呆れたとは言いつつも言葉の節々からはシグナムなりの優しさが感じ取れた。フェイトは苦笑いと共に一言謝るだけに留めた。

「全く……疲れが溜まっているのではないか？ 此処の隊長陣は無茶のし過ぎだ」

「あはは……」

乾いた笑みを無理矢理に搾り出し、その言葉に同意する。肩肘張らずに、頼れる時は頼れ、とシグナムはフェイトの肩を叩き、その場をゆっくりと離れて行った。

「全く。これもブレイズのせいなんだから」

背伸びをし、次いで深呼吸を二三度。幾分かスッキリした意識をそのままに、フェイトはしっかりとした足取りで進み始めた。

「今日も一日頑張ろう？」

誰に告げた言葉か。それは彼女自身にしか分からず、またそれを知る術は無い。

スバルは頭を捻りながら、一番苦手とする書類整備の作業に就いていた。時折隣に座る相棒を見遣り、その視線にHeipの意を窺

めて突き刺すものの、全く気付くそぶりは見えない。いや、恐らく気付いているだろうが、ここで甘やかしてはいけないという事か。

「うう……全然進まないよ……」

「確かに。こいつは見たもんじゃない。だがお前の頭の構造が垣間見れる」

独り言のつもりだったスバルの言葉。予期せぬ返答に変な悲鳴を小さく上げ、勢いよく後ろを振り返った。彼女のその先には大量の書類をもったブレイズが笑いを堪えながら佇む。

「ブレイズさん！ 驚かさないで下さいよー！」

「悪い 見てられなくてな」

蒼い髪を持つスバルの頭を左手で優しく撫で、後で手伝ってやるとだけブレイズは告げた。

そしてなのは向かいに立ち、その書類で軽く彼女の頭を叩いた。

「おい、部下が困ってるぞ」

「痛いよお……あ、書類できたの？」

頭を摩りながら諸悪の根源を少しだけ潤んだ瞳で見詰めるなのは、ブレイズの自称世界一高い理性の壁はどうやら脆過ぎたのか、壊滅寸前に追い込まれた。

「こんな簡単な書類、自分で作れるだろ？ 全く、自分は無茶をするくせに下には甘過ぎやしないか？」

やや乱暴に書類をなのはの机上に置き、視界に入った日限が今日迄の書類をふんだくった。

「まあ、その為に俺が居ると思えばいいさ」

その書類の束でなのはの頭を叩こうとしたブレイズであったが、寸前で止め、再度左手で優しく撫でる。

まさかこの歳になってまで頭を撫でられるという所謂子供扱いをされると思わなかったのか、彼女は頬を膨らまし、照れてはいながらも些かご機嫌ななめといった具合に落ち着いてしまったようだ。

「部下の前で子供扱いは禁止なの」

「俺からすりゃ皆可愛く愛すべき子供だ　ほら」

温いなのはの口撃に怯まず、ブレイズは随分と膨らんだ上着のポケットから暖かい紅茶を一本取り出した。

「頼れるお兄さんからだ」

なのははこの時初めてブレイズの笑みを見た。何時もの人をナメた笑みや、口角を上げた独特な笑みではなく、言うなれば綺麗な笑み。こんな顔出来るんだ、と紅茶を受け取り彼に感謝しながら一口含む。

彼女が気付けば、彼はスバルやティアナにも紅茶を渡していた。スバルはジュースがいいと漏らしてはいたが。

「ほら、見せてみる」

「お願いします　　って笑わないで下さいよお」

何処からか引つ張り出してきた椅子をスバルの隣に置き、自身も腰掛けたブレイズは、スバルの作成した書類の出来具合に笑った。それに対し先程のなのはよろしくご機嫌ななめになってしまった彼女に一言謝り、パソコンの画面と真剣に対峙する彼。その真剣な眼差しにスバルとなのはが一瞬、ほんの一瞬だけ胸が跳ねたのは、彼女達の名誉の為に伏せておく。

(日限、間に合ったんだ)

漠然と、ただただ漠然とティアナは漏らす。それは余りにも小さな声。決して誰も気付かず。貰いたての紅茶を飲みながら、ブレイズがなのはから新たな書類をふんだくった事に驚きを隠せない。

(噂と少し違うわね)

そう評したティアナではあったが、先日の馬鹿みたいな模擬戦の恨みを忘れていた訳ではない。ただ、ほんの少しだけ見直してやるうかと考えておこう　　といった具合。

そんな事を考えていたからか、気付けば隣に座っていたブレイズに彼女は内心驚いた。

大きい背中に、彼から僅かにだけ香る海を彷彿とさせる香水の匂いに。余り男性と関わりがなかった彼女にとってこれは新鮮だった。だがしかし、彼女は頭を振る事によって意識を覚醒させる。

(こいつはINSIGHT。役立たずのイエーガー執務官よ)

ブレイズから貰った紅茶を煽る様に一気に飲み干したティアナは、睨むように画面を見詰めた。何時の間にか彼から紅茶を貰った事実を忘れ、そんな忘れられた存在の紅茶の缶は、中身を無くした為、冷え切ってしまったのだった。

9th Laugh at ME (前書き)

駄文。展開が上手くない。話の終わりが奇妙。心理描写が下手くそ。自己満足度最高潮。故にやはり駄文。

「テストロッサ。この服装は何だ？」

「うん。似合ってるよ、シグナム」

ホテル・アグスタに機動六課は姿を現した。此処で戦争が起きた等といった物騒な話ではない。骨董美術用オークシヨンの来場警備及び人員警備の為だ。しかし、取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品される為、その反応をレリックと誤認したガジェットが出現する可能性が高いという訳でもある。こういった類のオークシヨンでは密輸取引の隠れ蓑になる場合もあるのだ。

本日の任務の為に、シグナムとヴィータ、他数名の隊員が先行して張っている。

「似合う似合わないを聞いている訳ではない。これは何か、そう聞いているのだが」

「……ブレイズが、シグナムがドレスを着たら任務に参加してやるって」

呆れた様に呟いたフェイトに、シグナムは眉間に皺を寄せるだけだった。

フェイトからの通信が入り、何事かと思えば、いや気付けばドレスへと着替えさせられ、果てはホテルの化粧室へと連行。シグナムの隣に立つはやては苦笑を浮かべる事しか出来なかった。

「ごめんなあ、シグナム。ブレイズ君がどうしても言つて聞かんのや。まあ、シグナムは美人なんやからたまにはお洒落でもせんと勿体ないやろ」

「主……」

苦笑を浮かべつつも、優しさが感じられる主の言葉にシグナムは戸惑いと感動を味わう。

守護騎士とはいえ女性である事に変わりはない。そして同性であるはやてなりの気遣いである。任務を軽く見ている訳ではないが、シグナムにもう少し柔らかくなつて欲しいとはやては思っていた。ならばとブレイズの我が儘に便乗して、という訳だ。

「ですが、警備は」

「ヴィータも居るしスバル達も居る。仲間を信用してへんの？」

少し意地の悪い言い方をしてしまったかとはやては思ったが、恐らくこう言わなくてはそれこそシグナムならドレスを脱ぎ捨て外の警備に行くだろう。それをさせまいが為の最後の手段だった。

「決してそういう訳では……分かりました。これより建物内の警備の任へ赴きます」

「貴様の御蔭だ。だから敢えて言わせてくれ。馬鹿か、と」

「……」

エントランスホールに姿を現したブレイズに、シグナムは早速罵ってみせた。

「どうやらはやて達はまだ化粧を直しているようだ。」

「任務を何だと思っっているんだ。その腐った性根を今すぐにでも叩き直してやりたい。おい、聞いているのか？」

会ってから口を開かないブレイズに怪訝な表情を浮かべてシグナムは言った。そんな彼女を尻目に、彼は驚いた表情を浮かべながら彼女の頭の頂点から足の爪先まで視線を何往復もさせ、ゆっくりと呟いた。

「……綺麗だ。似合ってるよ、シグナム」

「世辞等要らない」

「世辞なんかじゃないさ。本気で言ってる」

ブレイズにしては珍しく呆けた表情を浮かべた。それを見たシグナムは二の句を言えず、そうかとただ頷くだけだった。

「何、してるのかな？」

初々しい雰囲気をブチ壊したのは金色の死神。不気味な笑みが浮かんだ口元に反して、その眼は全く笑えていない。

「ああ、フェイト……お前も綺麗だ」

死神の囁きに振り返れば、正しくブレイズの言葉通りの姿。その後ろに伴うのも同じく綺麗だと称するに相応しい二人。

「ブレイズ君、どうかな？」

「私も似合つとるやろ？」

ブレイズはこんな大事な瞬間にまともに働かない脳を一生懸命に呪った。そしてこの四人の総合的な戦闘能力を思い出し、絶望したのだった。

「今度、私と食事でも」

「スイマセン。人を探していました。またの機会に、Lady？」

何回目になるか分からない随分と魅力的な誘いに、ブレイズは澁々断りの返答をプレゼントしていた。

(何処に行ったんだ、全く……)

ブレイズはフェイトと一緒に会場内の警備をする筈だったが、彼がトイレに行った僅かの間に姿をくらました。

知らない奴に着いていくなって教わらなかったのか？

小学生に言い聞かせる様に内心愚痴を零す。

余り焦ってはいないが、彼女は良くも悪くも天然だと認識している故に、妙な不安が彼を煽るのも事実。

「手間取らせやがって」

会場を出て、少し離れた人気の少ない廊下に目当ての金髪が揺れているのを見付けたブレイズ。どうやって虐めてくれようかと妖しい笑みを浮かべれば、それは直ぐに掻き消えた。

「離して下さい！」

「そんな事を言わずに。僕はこれでも名のある会社の跡取りでして」

だからどうした、糞野郎。

無表情のまま近づくブレイズに気付かず、フェイトに執拗に絡む男は齒の浮く様な詰まらない言葉を羅列し、彼女の腕を握って離さない。

彼女も執務官という立場な為、下手な行動も出来ず。また、このオークションに参加する人間の中には管理局に顔の効く輩も居る。

ブレイズだったら。

ふと考えてしまうのは元恋人。きっと彼ならば紳士に自分をエスコートしてくれるだろう。きっと彼ならば面白い冗談を聞かせてくれるだろう。きっと彼ならば無理矢理ではなく、優しく自分を抱きしめるだろう。

そして彼女は気付いた。自分にはブレイズしかいないのではないかという事。もう一つは噂の彼が詰まらない男の背後に居るという事。

「残念だな。お前じゃこいつに釣り合わない」

そう言ってブレイズはしつこい男を投げ飛ばした。男は地面に倒れ込み、ブレイズを睨む。

「何だ、その眼は」

「貴様ツ！ 僕を誰だか分かってるのか！」

男は立ち上がり、顔を真っ赤にしてブレイズに詰め寄った。彼は背にフェイトを隠し、男を睨みつけて鼻で笑った。

「フン、知らないな、お前みたいな糞餓鬼は」

さも詰まらなさとブレイズは無表情で告げ、手で追い払う仕種を見せた。

男は遂に激昂し、ブレイズの背に隠れていたフェイトの腕を掴み取り、さも彼女を助けたかの様に振る舞う。

「フェイトさん、この野蛮人には近付くと危ないです！ 僕が助けるから安心して下さい」

フェイトの顎を掬い、無理矢理視線を合わせる。だがそれは導火線に火を点けた。

男は気付けば地に吹っ飛んでいた。口内がズタズタになり鉄の味が支配した。そして齒が何本か口から零れ出てしまったのだ。

「おい、糞餓鬼。いいか、糞餓鬼。お前みたいな糞餓鬼が触れていい程こいつは安くない。分かるか？ 分かったのか？ 分かったよな？」

ブレイズの殺気に男は何度も首を縦に振り、勢いよくその場を逃げ出した。男は運がよかった。あと少し間違えていたのなら、此処から逃げる事など出来なかったのだから。

「フェイト、大丈夫ツ　　?!」

逃げ去った男の顔を鮮明に覚えたブレイズはゆっくりとフェイトに振り返る。そうすれば自分の胸に飛び込んできたのは金の弾丸。

「遅い、遅いよ。もう少し遅かったら私、どうにかされてたかもしれないんだよ？」

「そいつは残念な事をした。もう少しであの糞餓鬼を殺す理由が出来たのに」

「冗談混じりにブレイズは言った。その左手は優しくフェイトの背を撫でていた。

「随分と物騒だね」

「ああ。お前がイイ女だから悪いんだ」

ブレイズの胸に埋めていた顔を上げて、フェイトは彼と笑い合った。

「さあ、警備に洒落込もうか、Lady?」

「喜んで」

紳士らしく優雅に手を差し出せば、フェイトもブレイズに習い、ゆっくりと彼の手を取ったのだった。

「さあ、仕事の時間だ。」

ブレイズは右手に太刀を握った。随分と便利な魔法だと笑った。

暗闇をただゆっくりと歩く。途中ガジェットと遭遇するも容易に斬って捨てた。

恐らく今回の騒動が鎮火した頃には、自分は部隊長当たりに怒鳴られる事になるだろうと考え、少し苦い表情を浮かべた。

「よお、何処に行くんだ？」

暫く歩き、目的の人間を見付けた彼は軽く尋ねた。

「お前はッ?!」

振り返った目的の人間は、フェイトに執拗に絡んでいた男。

「残念な事にお前には消えてもらおう。何故か分かるか？」

その言葉に男は力無く地に座り込み、震える身体を無視して首を横に振った。

「人身売買……これだけでもお前はブタ箱に入らなけりゃいけねえ。だが、お前はそれ以上の事をしでかしてくれた」

男の顔は青白く、口をだらし無く開いたまま。その様を見詰めながらブレイズは至極簡単に話す。

「潜入捜査官の名簿、対管理局の組織に売ったろ？」

自分の言葉にブレイズは可笑しい話だと内心笑った。潜入捜査官の名簿が外部に漏洩する事が可笑しいと。恐らくよっぼどの能無し糞野郎のミスか、局に裏切り者が居たか。だがそこは彼が未だ踏み込んでいい部分ではない。黒に染まった彼は白は勿論の事、グレー

ゾーンにすら踏み込めない。

「裏切り者は何れ始末しなけりやな。だが先ずはお前からだ。一度でも局のネタを仕入れた奴を生かしてはおけないのさ」

呑気に煙草を吸い始めたブレイズではあるが、彼を中心に渦巻く殺気は男を追い詰めていく。

男は恐怖からか、必死に彼から離れようとはいつくばる。彼はゆっくりと歩いて男を追う。

「落ち着けよ、なあ。一瞬で済む」

遂に男に追い付いたブレイズは男の正面に立ち、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「ああ、忘れてた。俺はブレイズ、お前を殺した男だ」

男は既に息は無く。頭と体が縁を斬っていた為に。

「悪いな。どうせ直ぐに会う事になるさ See you later」

太刀を掻き消したブレイズが右手を翳せば、不気味な色の炎が事切れた男を燃やした。その炎をぼんやりと眺めていた彼は煙草を銜え、哀しい色を浮かべた瞳を伏せ呟いた。

「何時からだ？」

「その男を追い詰めたところからだ」

見られちゃったか。

寂しそうに呟いた。そして後ろを振り返れば予想通りの姿を視界に捉える。

「よお、シグナム。ドレスはどうした？」

「そんな物、破って捨てた。それよりもだ、貴様は何をしていた？
答える」

レヴァンティンをセットアップしたシグナムは先程のブレイズ同様、ゆっくりと彼へと詰め寄った。

「この男を殺し、遺体を燃やした。満足か？ なら先行くぞ」

「行かせると思っか」

シグナムから視線を外してこの場を立ち去ろうとするブレイズに、彼女はレヴァンティンの切っ先を迷わず彼の喉元に突き付けた。

「随分と物騒だな。皆が待ってる筈だ、戻るぞ」

「何故殺した」

答えようとしないブレイズに苛立ちを隠す事無くシグナムは再度問う。彼女の態度に彼は分かったよと溜息を零した。

「Kill request。この男はとある罪を犯し、そして俺はrequest通り殺した」

淡々と言い放った。感情も何も籠っていない。機械の様に言い放

ったのだ。

「誰の依頼だ？」

「それは言えない。言ったら最後、管理局は終わるだろう」

暗に含みを持たせて言えば、シグナムは一度悩むそぶりを見せるも、切っ先は揺るがない。

「……何故殺した？」

「……………」

ブレイズは黙ってシグナムの瞳に視線を合わせた。その瞳に写る自分が滑稽に思えた。

「罪悪感はある。だが俺が手を汚した結果、他の奴等が笑えるのならそれでいい。人の道を外れてもいい。周りの奴等が笑えるのなら、俺は今お前に殺されてもいい」

淡々と、だが今度は小さい声ながらも力強くシグナムに言った。

「軽蔑されてもいい」

「何故私に話した？」

気持ち悪い夜風が二人の頬を撫でた。その風に乗って届いたシグナムの声にブレイズは笑った。

「正直、俺自身分からない。ただ理解されなくて構わないから、お

前には知って欲しかったのかもしれない」

笑えるだろ？

笑ったブレイズにシグナムは笑えない。随分と複雑な状況に彼女自身混乱していたからだ。場違いながらも、この空間だけは妙に静かだとも思っていた。

殺人の瞬間を見た後は、犯人の悲しい叫びが彼女の心を震わせた。

「ッ！」

「軽蔑してくれても構わない。だが今だけは許してくれ」

レヴァンテインの切っ先を避け、シグナムを自身の腕に閉じ込めたブレイズは彼女の首筋に顔を埋めて呟いた。

「次は止める。そしてお前を捕まえ、依頼主も捕まえる」

「……ああ」

「主はやてにも、他の者にも黙っておくが、次は決して容赦はしない」

「……ああ」

「だが今だけは友の情けだ、私の胸を貸してやる」

「……ああ」

自身を抱きしめる力が強くなった。ブレイズと彼に殺された命を天秤に掛けてしまった自分に、シグナムは酷い罪悪感を覚えたのだ

つ
た。

10th Miss ? (前書き)

相当に短いが、キリが良かったから投稿してみた。内容は置いてこ
うか。内容なんて無いよう、なんつってort

アグスタから無事に撤収した機動六課は重苦しい空気に包まれていた。

ブレイズはそれを肌で感じ取るも、シグナムを横目で一瞥し、敢えて触れない事にした。

そして逃げ出す様にフラフラと歩いていれば、見知った男が現れた。

「おっ、ブレイズ。いいところに来た」

「俺はよくないがな」

助かったと言わんばかりの笑みでブレイズに話し掛けたのはヴァイス。INSIGHTとして忌み嫌われている彼に親しげに接する人間はそうは居ない。だがヴァイスは違った。

恐らくブレイズから何かを感じとったのか、以来友と評する程の距離に近付いた二人。

「ティアナの事なんだが」

「そうか、任せろ。安心しろ、守備範囲は広いんだ」

「いや、違う」

的を大きく外したブレイズの答えに引き變った笑みをヴァイスは

浮かべた。

その笑みを消し、一度悩んだそぶりを見せてまた口を開いた。

「ぶっ続けで練習しててよ。恐らく今日のミスショットが堪えたのか、余計に張り切ってたな」

「ミスショット？」

分からないという反応にゆっくりとヴァイスは説明を始めたのだ。
った。

静かな筈の木々の集落に銃声が響いた。

ティアナはスバルを撃ち落としそうになった瞬間を思い出し、唇をきつく噛み締めた。

（私は凡人、なんだ）

設置したスフィアを狙うも外してしまう。

すると後ろから聞こえる手の叩く音。嫌な予感がした彼女が振り返れば、そこには嫌な予感が居た。

「そろそろ寝る時間だ。こんな時間に可愛い子が一人で居ると何かと危険だぞ？」

冗談混じりに話すブレイズは、自身が嫌な予感をさせたとは露程にも思わない。

練習を中断し、ティアナは彼を見て嫌な顔を隠そうとしない。

「何か？」

刺々しい声音でブレイズにぶつけるも、彼は両手を広げてわざとらしく溜息を零した。

「何でも。ただ仲間を撃とうとするなんて、中々やるな」

「……」

ティアナは無視を決め込んだ。クロスミラージュが悲痛な叫びを上げようと、彼女は手に力を籠める事を決して止めない。唇を痛い程に噛み締め、ブレイズを侮蔑の視線で射殺し、口を開かず。

彼女は分かっていた。今口を開けば罵言雑言しか出てこない事を。それは上官に対して行うには褒められた行為ではない。内心では口に出す事すら憚れる呪詛を零してはいるが。

「まあ、冗談は止めよう。差し入れた」

人を喰った笑いを止め、穏やかな表情でミネラルウォーターをティアナに投げ渡す。突然の差し入れに戸惑いながらも、彼女は感謝の言葉を言う気は更々無い。それを分かっていたのか、ブレイズは自身の缶珈琲のプルタブを引いた。

小気味いい音がしたそれを一口含み、自分で煎れたほうがいと苦笑を零した。

「俺は何も言うつもりはない。戦争にはそついう策も有る。実に機転が効いている」

何を言っているのだと思う。ティアナは適当に寄り掛かるブレイズを食い入る様に見詰めた。

「一機でも多くガジェットを撃墜しようとしたただけだろうか？ お前は一生懸命だった。それだけだ」

「……はあ」

間抜けだとティアナは自身に苛立った。先程迄のブレイズへの怒りは消え、変わって燈ったのは自身への怒り。何故自分はこれ程までに弱いのかと。

私は、凡人だ。

「まあ、取り敢えず今日は休め。疲れが溜まってたらいい仕事なんざ出来やしない。まあ、溜まってたら相手になるが」

途端、ティアナを襲ったのは羞恥心。何とも下品な物言いに彼女は大事な部分を手で隠し、ブレイズを冷たい視線で射しまくる。

「安心しろ。お前はいい女だ」

勢い良く残った珈琲を飲み干したブレイズは、空き缶を潰してティアナに背を向けた。

ヒラヒラと背で手を振る彼に不思議と苛立ちは収まった。そして漸く姿の見えなくなった彼の背を忘れ、改めてスフィアを設置。クロスミラーージュを優しく握り、ビットを狙う。

穿つ。貫く。兄さんの、私の弾丸は全てを貫く！

耳に届いたのは空を切り裂く弾丸の音。それがやけに心地好く夜空に掻き消えた。

眠い。何で模擬戦なんざ見なけりやいけないな。俺には分かない。こいつも分かりやすく説明しろ、阿呆金。

ブレイズは訓練所に向かう通路をひた走る。いやひた走らされていた。

彼の手を引っ張り、金髪をユラユラと揺らして走るのはいわずもがなフェイトその人だった。

「何か言った？」

「いや、何も」

これでブレイズは一度死んだ。そして彼は心に決めたのだ。ブロードの尻を追うのは止めようと。追うのは金の尻尾だけだと。何故なら、追わなければ自身の尻が焼け焦げるから。

「今日の模擬戦はなのはの代わりに私が引き受けようと思ったんだけど　ブレイズ執務官にお願いしようかな？」

「自分の言葉に責任を持って。そして思い出せ、お前が模擬戦を引き受けようとしたその訳を」

フェイトが宣った事に対し、ブレイズは引かれている手を振りほどこうかとも思った。日陰でひっそりと書類を整理する自分に、若さ溢れる隊員の相手が務まる筈がないだろうと。荷が重過ぎて、きつと彼は潰れる。

「とにかく、馬鹿な事考えてないで走る！」

「……………」

ブレイズは口を閉ざす。一度開いたなら馬鹿な言葉が湯水の様に出てくるからだ。ただ一つだけ彼は思った。

馬鹿な事を考えさせるのは責様だよ。

一瞬微弱な電気に体が痺れたのは気のせいだった。

ビルの階段を必死に登ったブレイズは髪をかき上げ、呼吸を整えながら、既に始まっていた模擬戦を見遣る。フェイトはエリオやキヤロ、ヴィータと何やら話をしているようだ。

キレが糞程も無い。

恐らく何か策でもあるのだろうと彼は考えるも、その策の為に阿呆な動きをするヒヨッコに毒づいた。

彼の考える事を、模擬戦を見ていた者も実際に相手をしているのはも感じていた。

そしてスバルがウイングロードを起動し、なのはへとその勢いをぶつけようと肉薄する。

「フェイクじゃない?! 本物?!」

本物の勢いを削ぐ為に、なのはは魔力弾をスバルへと放つも、スバルはそれをシールドで防ぎ踏ん張った。踏ん張って尚、スバルはなのはへ迫るが、なのはもまたシールドを展開しスバルを薙ぎ払った。

「こら! スバル! 駄目だよ、そんな危ない機動!」

危ない以上に馬鹿だ。

ブレイズは冷静に模擬戦の展開を見詰めていた。随分と嫌な展開

だと。いや、嫌な予感がすると。別段自身が不利益を被る訳ではないが、心の奥の方で誰かが彼に語り掛けるのだ。今すぐ模擬戦を止めると。

異常な程の感覚に彼の右腕が一度大きく脈を打った。左手で右腕を思い切り握り締め、漸く疼きが収まった。彼は溜息を一つ零し、模擬戦を改めて見遣る。

「レイジングハート ……モードリリース」

冷たい囁きに、ブレイズの右腕は再度大きく脈を打ち、気付けば大太刀を握っていた。そして彼の右眼は痛い程に疼いていたのだ。た。た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5808i/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~新しい世界に霞む灯~

2010年10月28日08時41分発行